

目録情報の基準 第6版

第0部 日本目録規則 2018年版について

0.0 日本目録規則 2018年版の NACSIS-CAT への適用について

日本目録規則 2018年版（以下「NCR2018」という。）は、それまでの日本目録規則 1987年版（以下「NCR1987」という。）を抜本的に見直し、準国際的に普及している目録規則である RDA との相互運用性を意識して策定されている。RDA は、FRBR、FRAD、FRSAD といった実体関連分析の手法を使用した概念モデルに基づいており¹、その概念モデルは実体、関連、属性を構成要素としている。

NACSIS-CAT の国際標準への対応を進めるため、NACSIS-CAT が準拠する目録規則を NCR2018 に変更する。RDA は、「英米目録規則第2版」（以下「AACR2」という。）の後継の目録規則ではあるが、頻繁な更新が行われ、オンライン共同分担目録方式に必要な統一的な運用方針を常に更新することが困難であること、NCR2018 は洋資料の運用も想定された規則であることから、和資料と洋資料の目録規則を NCR2018 に統一する。目録用言語は従来通り、和資料は日本語、洋資料は英語とする。

以下は、NACSIS-CAT との比較を行うため、NCR2018 の「第0章 総説」について項目を引用しつつ概説する。なお、「第0章 総説」のうち、#0.1～#0.2、#0.4、#0.5.7～#0.5.9、#0.6～#0.9、付表は割愛している。

0.1 概念モデル

NCR2018 #0.3 本規則が依拠する概念モデル

本規則が依拠する概念モデルは、FRBR 等の概念モデルを基本としている。FRBR 等は実体関連分析の手法を使用した概念モデルであり、実体、関連、属性をその構成要素とする。本規則が依拠する概念モデルの概要を、図 0.3 に示す。

¹ 2020年12月から RDA は、FRBR、FRAD、FRSAD の3つの概念モデルを統合した新たな概念モデルである、IFLA Library Reference Model (LRM)に対応している。

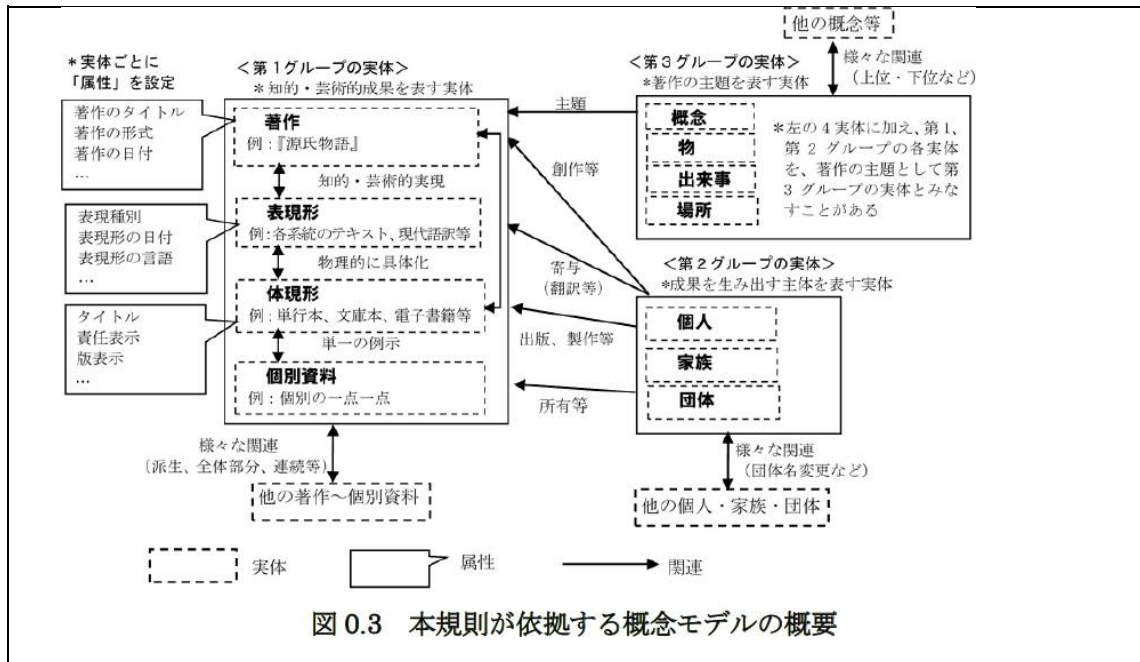


図 0.3 本規則が依拠する概念モデルの概要

(出典：「日本目録規則 2018 年版」(日本図書館協会目録委員会編、2018 年) p23)

0.1.1 実体

NCR2018 #0.3.1 実体

実体は、書誌データの利用者の主要な関心対象を表す単位である。目録は、各種の実体についての記述(属性および関連の記録)から成る。

本規則における実体は、第1グループ、第2グループ、第3グループの3種から成り、合わせて11個ある。

第1グループの実体は、知的・芸術的成果を表す。次の4つの実体があり、著作、表現形、体现形、個別資料の順に、順次具現化される構造をもつ。

a) 著作

個別の知的・芸術的創作の結果、すなわち、知的・芸術的内容を表す実体である。例えば、紫式部による『源氏物語』の知的・芸術的内容は、著作である。著作には、法令等、音楽作品などを含む。また、雑誌など多くの著作を収録した資料も、その全体の知的・芸術的内容を、著作ととらえる。

b) 表現形

文字による表記、記譜、運動譜、音声、画像、物、運動等の形式またはこれらの組み合わせによる著作の知的・芸術的実現を表す実体である。例えば、著作『源氏物語』の原テキスト(厳密には各系統がある)、各種の現代語訳、各種の外国語訳、朗読(話声)などは、それぞれ表現形である。音楽作品の場合は、ある作品(著作)の記譜や個々の演奏が、それぞれ表現形である。

c) 体现形

著作の表現形を物理的に具体化したものを表す実体である。例えば、著作『源氏物語』のある現代語訳のテキスト（表現形）の単行本、文庫本、大活字本、電子書籍などは、それぞれ表現形である。

d) 個別資料

表現形の単一の例示を表す実体である。例えば、刊行された図書の、図書館等に所蔵された個別の一点一点は、それぞれ個別資料である。2 巻組の辞書のように、複数のユニットから成ることもある。

本規則では、第 1 グループの実体の総称として、「資料」の語を用いる。また、表現形または表現形を種類分けする場合（例えば、更新資料、地図資料、三次元資料）、情報源に言及する場合（例えば、資料自体、資料外）などに、必要に応じて「資料」の語を用いることがある。

第 2 グループの実体は、知的・芸術的成果を生み出す主体を表す。次の 3 つの実体がある。

e) 個人

(略)

f) 家族

(略)

g) 団体

(略)

第 3 グループの実体は、著作の主題となるものを表す。次の 4 つの実体がある。

h) 概念

(略)

i) 物

(略)

j) 出来事

(略)

k) 場所

(略)

さらに、第 1 グループおよび第 2 グループの各実体を、著作の主題として、第 3 グループの実体とみなすことがある。

本規則では、第 3 グループの実体の総称として、「主題」の語を用いることがある。

(出典：同書 p24-25)

NACSIS-CAT では統一書名典拠データセットを、著作の典拠データセットとし、名称も「著作典拠データセット」に変更する。書誌データとの関連はリンクブロックの UTL データで表される。

表現形については独立したデータ作成は行わないが、UTL データ上に表現形の識別要素を記録することができる。

表現形が書誌データ作成の基本になるが、書誌データの中には上記の著作、表現形の要素も含んだ形となる。

個別資料は所蔵データとして表される。

0.1.2 属性

NCR2018 #0.3.2 属性

属性は、実体の発見・識別等に必要な特性である。実体ごとに必要な属性を設定する。属性の記録は、関連の記録とともに、実体についての記述を構成する。

(出典：同書 p25)

NACSIS-CAT のフィールド定義における「属性」(固定長/可変長)とは異なる概念である。

0.1.3 関連

NCR2018 #0.3.3 関連

関連は、実体(資料、個人・団体、主題)間に存在する様々な関係性である。異なる実体間に存在する関連(例えば、著作とそれを創作した個人との関連)と、同じ種類の実体間に存在する関連(例えば、ある著作とそれを映画化した別の著作との関連)とがある。関連の記録は、属性の記録とともに、実体についての記述を構成する。

(出典：同書 p25)

NACSIS-CAT では、関連に該当するものとして以下のリンクがある。なお、関連は、CW フィールドなど、コーディングマニュアルの「記述ブロック」に書かれる場合もある。

(1) 書誌構造リンク

図書館の体现形の書誌データと本基準 0.2.6 における最上位の書誌レベルの体现形の書誌データとの関連

(2) 所蔵リンク

図書館および雑誌の体现形の書誌データと個別資料の所蔵データとの関連

(3) 著者名リンク

図書館および雑誌の体现形の書誌データと個人・家族・団体に対する著者名典拠データとの関連

(4) 著作名リンク

図書館の体现形の書誌データと著作の典拠データとの関連

(5) からも見よ参照リンク

本基準 0.1.4 の統制形アクセス・ポイントの典拠形アクセス・ポイント同士の関連

(6) タイトル変遷リンク

先行雑誌(変遷前誌)の書誌データ内にあらわされる著作と後続雑誌(変遷後誌)の書誌データ内にあらわされる著作との関連

0.1.4 名称、識別子と統制形アクセス・ポイント

NCR2018 #0.3.4 名称、識別子と統制形アクセス・ポイント

本規則における実体の識別には、名称および（または）識別子、名称を基礎とする統制形アクセス・ポイントが重要な役割を果たす。

名称は、それによって実体が知られている、語、文字および（または）その組み合わせである。例えば、資料の名称としての「タイトル」がある。

識別子は、実体を一意に表し、その実体と他の実体を判別するのに役立つ番号、コード、語、句などの文字列である。識別子の具体例としては、ISBN、ISSN が挙げられる。

目録の機能を実現するためには、典拠コントロールを行い、各実体に対して統制形アクセス・ポイントを設定する必要がある。統制形アクセス・ポイントには、典拠形アクセス・ポイントと異形アクセス・ポイントがある。統制形アクセス・ポイントは、名称またはタイトルを基礎として構築する。

（出典：同書 p25-26）

NACISIS-CAT では、典拠形アクセス・ポイントは、これまでの著者名典拠データ、統一書名典拠データの統一標目形に該当し、NCR2018 に合わせて典拠形アクセス・ポイントの語を使用する。また統一書名典拠データは NCR2018 適用後は、著作典拠データに変更する。異形アクセス・ポイントは、著者名典拠データ、著作典拠データの「から見よ参照」に該当する。

0.2 概要

#0.5 本規則の概要

0.2.1 エレメント

NCR2018 #0.5.1 エレメント

本規則は、目録の機能の実現に必要な、実体の属性および実体間の関連を「エレメント」として設定し、記録の範囲や方法を規定する。

（出典：同書 p26）

NACISIS-CAT では、「エレメント」はフィールドもしくはフィールドのデータ要素に該当する。

0.2.1.1 下位のエレメント

NCR2018 #0.5.1.1 下位のエレメント

エレメントを細分する場合がある。この場合、下位のエレメントには、エレメント・サブタイプとサブエレメントとがある。

エレメント・サブタイプは、エレメントを種類によって区分したときの下位のエレメントである。例えば、エレメント「タイトル」における本タイトル、並列タイトル、タイトル関連情報などである。

サブエレメントは、エレメントの構成部分となる下位のエレメントである。例えば、エレメント「出版表示」における出版地、出版者、出版日付などである。（出典：同書 p26-27）

NACSIS-CAT では、「エレメント・サブタイプ」、「サブエレメント」共に、フィールドのデータ要素に該当する。

0.2.1.2 コア・エレメント

NCR2018 #0.5.1.2 コア・エレメント

エレメントのうち、資料の発見・識別に欠かせないものを「コア・エレメント」とする。特定の条件を満たす場合にのみコア・エレメントとするものもある。コア・エレメントは、適用可能でかつ情報を容易に確認できる場合は、必ず記録するものとする。

(参照: #0 末尾の付表を見よ。)

当該のエレメントがコア・エレメントであるとき、規定の冒頭においてその旨を明記した。明記していないエレメントは、任意のエレメントである。

(出典: 同書 p27)

NACSIS-CAT では、「コア・エレメント」を「必須 1」、「必須 2」とする。

「コア・エレメント」でない「エレメント」は、入力レベルが「選択」のフィールドに該当するが、NACSIS-CAT のシステム上必要となる場合は、NCR2018 で「コア・エレメント」でない「エレメント」も「必須 1」、「必須 2」とすることができる。

0.2.1.3 エレメントの記録の方法

NCR2018 #0.5.1.3 エレメントの記録の方法

記録の方法の観点から見て、エレメントには次の種類がある。

- a) 情報源における表示の転記を原則とするエレメント
- b) 統制形による記録を行うエレメント
- c) 本規則に提示された語彙のリストからの選択を原則とするエレメント
- d) 計数・計測した値（量や大きさなど）の記録を原則とするエレメント
- e) 上記のいずれにもよらず、文章等により記録を行うエレメント

(参照: #1.9 を見よ。)(出典: 同書 p27)

NACSIS-CAT では、各フィールドの規定に即して a)~e)の各方法を適切に選択する。NOTE フィールドに表現種別・機器種別・キャリア種別の用語や基底材、制作手段の属性のエレメントなどを記録する場合は、c)の NCR2018 の語彙のリストからの選択を行う。

0.2.1.4 実体の記述

NCR2018 #0.5.1.4 実体の記述

各実体について、その属性および関連の要素の記録を行ったデータの集合を、「記述」と呼ぶ。

(出典：同書 p27)

本基準第1部～第3部において「記述」という用語を使用しているが、第0部において「記述」は、上記の意味で用いる。(ただし、本基準0.1.3の「記述ブロック」は除く)

0.2.2 属性の記録

NCR2018 #0.5.2 属性の記録

実体ごとに、その発見・識別等に必要属性の要素を設定している。このうち、表現形に関する属性の記録が、資料の識別に根幹的な役割を果たす。

(参照: #1.3 を見よ。)

著作、表現形、個人・家族・団体、概念、物、出来事、場所に関する属性の記録の多くは、典拠コントロールに用いる。

(出典：同書 p27)

NACSIS-CATでの属性の記録は、適用細則を参照すること。NACSIS-CATの書誌データには、原則として表現形に関する属性を記録するが、著作、表現形の属性も記録する場合がある。和古書、漢籍、西洋古典籍等の古典籍資料の書誌データは、表現形、著作、表現形に加え、個別資料に関する属性も記録することができる。著作、個人・家族・団体は、典拠形アクセス・ポイントとして、それぞれ著作典拠データ、著者名典拠データを作成する。NACSIS-CATでは著者名典拠データは会議についても作成しているため、著者名典拠データのコーディングマニュアルは個人・家族・団体・会議の項目となっている。

0.2.3 資料の種別

NCR2018 #0.5.3 資料の種別

資料の種別について、表現形の種類を表す「表現種別」(参照: #5.1 を見よ。)、表現形の種類を表す「機器種別」(参照: #2.15 を見よ。)&「キャリア種別」(参照: #2.16 を見よ。)、刊行方式の区分(参照: #2.12 を見よ。)を設定して、多元的にとらえる。

従来の目録規則がとっていた資料種別による章立ては行わない。属性等の記録において、特定の種別の資料に適用される規定がある場合は、原則として一般的な規定の後に置く。

(出典：同書 p27)

NCR2018の資料の種別は、NACSIS-CATの一般資料種別コード、特定資料種別コード(GMD/SMD)とは体系が異なる。NCR2018適用後も、GMD/SMDは継続する。

NCR2018では、「機器種別」、「キャリア種別」、「表現種別」の用語は、それぞれ

れ、表 2.15.0.2、表 2.16.0.2、表 5.1.3 に記載されており、NACSIS-CAT では、これらの表から適切な用語を選択し、注記に記録する。参考のため、NCR2018 の表 2.15.0.2、表 2.16.0.2、表 5.1.3 を以下に引用する。

NCR2018 表 0-1 機器種別

映写 projected	動画または静止画を保持し、映画フィルム・プロジェクター、スライド・プロジェクター、OHP などの映写機器の使用を想定した体現形に適用する。二次元、三次元いずれの画像も該当する。
オーディオ audio	録音音声を保持するなどし、ターンテーブル、オーディオカセット・プレーヤー、CD プレーヤー、MP3 プレーヤーなどの再生機器の使用を想定した体現形に適用する。アナログ方式、デジタル方式いずれの音声も該当する。
顕微鏡 microscopic	肉眼では見えない微小な対象を見るために、顕微鏡などの機器の使用を想定した体現形に適用する。
コンピュータ computer	電子ファイルを保持し、コンピュータの使用を想定した体現形に適用する。コンピュータ・テープ、コンピュータ・ディスクなどにローカル・アクセスする場合と、ファイル・サーバを通じてリモート・アクセスする場合のいずれも該当する。
ビデオ video	動画または静止画を保持し、ビデオカセット・プレーヤー、DVD プレーヤーなどの再生機器の使用を想定した体現形に適用する。アナログ方式、デジタル方式いずれの画像も該当する。二次元、三次元いずれの画像も該当する。
マイクロ microform	閲覧するために拡大を必要とするマイクロ画像を保持し、マイクロフィルム・リーダー、マイクロフィッシュ・リーダーなどの機器の使用を想定した体現形に適用する。透明、不透明いずれの媒体も該当する。
立体視 stereographic	三次元効果を与えるように、対をなす静止画によって構成され、ステレオスコープ、立体視ビューワなどの機器の使用を想定した体現形に適用する。
機器不用 unmediated	機器を使用せず、人間の感覚器官を通して直接認識することを想定した体現形に適用する。印刷、手描き、点字などによって作製された資料、彫刻、模型などの三次元資料が該当する。

該当する機器種別が存在しない場合は、「その他」または「other」と記録する。

該当する機器種別が容易に判明しない場合は、「不明」または「unspecified」と記録する。

(出典：同書 p224 の表 2.15.0.2 機器種別の用語)

NCR2018 表 0-2 キャリア種別

対応する機器種別*	キャリア種別
映写 projected	トランスペアレンシー overhead transparency
	スライド slide
	フィルム・カセット film cassette
	フィルム・カートリッジ film cartridge
	フィルムストリップ filmstrip
	フィルムストリップ・カートリッジ filmstrip cartridge
	フィルムスリップ filmslip
	フィルム・リール film reel
	フィルム・ロール film roll
オーディオ audio	オーディオカセット audiocassette
	オーディオ・カートリッジ audio cartridge
	オーディオ・シリンダー audio cylinder
	オーディオ・ディスク audio disc
	オーディオテープ・リール audiotape reel
	オーディオ・ロール audio roll
	サウンドトラック・リール sound-track reel

顕微鏡 microscopic	顕微鏡スライド microscope slide
コンピュータ computer	コンピュータ・カード computer card
	コンピュータ・チップ・カートリッジ computer chip cartridge
	コンピュータ・ディスク computer disc
	コンピュータ・ディスク・カートリッジ computer disc cartridge
	コンピュータ・テープ・カセット computer tape cassette
	コンピュータ・テープ・カートリッジ computer tape cartridge
	コンピュータ・テープ・リール computer tape reel
	オンライン資料 online resource
ビデオ video	ビデオカセット videocassette
	ビデオ・カートリッジ video cartridge
	ビデオディスク videodisc
	ビデオテープ・リール videotape reel
マイクロ microform	アパーチュア・カード aperture card
	マイクロオパーク microopaque
	マイクロフィッシュ microfiche
	マイクロフィッシュ・カセット microfiche cassette
	マイクロフィルム・カセット microfilm cassette
	マイクロフィルム・カートリッジ microfilm cartridge

	マイクロフィルム・スリップ microfilm slip
	マイクロフィルム・リール microfilm reel
	マイクロフィルム・ロール microfilm roll
立体視 stereographic	立体視カード ^① stereograph card
	立体視ディスク stereograph disc
機器不用 unmediated	オブジェクト object
	カード ^① card
	冊子 volume
	シート sheet
	フリップチャート flipchart
	巻物 roll

該当するキャリア種別が存在しない場合は、「その他」または「other」と記録する。

該当するキャリア種別が容易に判明しない場合は、「不明」または「unspecified」と記録する。

*表 2.16.0.2 は機器種別とキャリア種別の一般的な対応関係を示したものであり、例外的に、この表に記載されていなくても適切な用語の選択が必要となる場合がある。

【機器種別】 オーディオ

【キャリア種別】 冊子

(スキャントークリーダーで再生されるバーコードが印刷された冊子体資料)

(出典：同書 p225 の表 2.16.0.2 機器種別の用語)

NCR2018 表 0-3 表現種別

テキスト text 視覚認識する言語表現に適用する。
テキスト (触知) tactile text 触覚認識する言語表現に適用する。点字、ムーン・タイプなどの触読文字が該当する。

楽譜 notated music 視覚認識する音楽記譜に適用する。
楽譜（触知） tactile notated music 触覚認識する音楽記譜に適用する。点字楽譜などが該当する。
運動譜 notated movement 視覚認識する運動記譜に適用する。
運動譜（触知） tactile notated movement 触覚認識する運動記譜に適用する。
地図 cartographic image 視覚認識する静止画としての地図表現に適用する。シート状の地図、地図帳、対景図、リモートセンシング図などが該当する。
地図（触知） cartographic tactile image 触覚認識する静止画としての地図表現に適用する。
地図動画 cartographic moving image 二次元動画としての地図表現に適用する。地球などの天体を映した衛星動画などが該当する。
三次元地図 cartographic three-dimensional form 視覚認識する三次元形状の地図表現に適用する。地球儀、地形模型などが該当する。
三次元地図（触知） cartographic tactile three-dimensional form 触覚認識する三次元形状の地図表現に適用する。
地図データセット cartographic dataset コンピュータ処理用にデジタル・コード化したデータセットとしての、地図表現によるデータに適用する。画像または三次元形状として認識する地図データは除く。 参照: 地図 参照: 地図（触知） 参照: 地図動画 参照: 三次元地図 参照: 三次元地図（触知）
静止画 still image 視覚認識する線、図形、陰影などによる、二次元の静的な画像表現に適用する。線図、絵画、写真などが該当する。地図は除く。 参照: 地図
静止画（触知） tactile image 触覚認識する線、図形などによる、二次元の静的な画像表現に適用する。
二次元動画 two-dimensional moving image 視覚認識する二次元の動的な画像表現に適用する。音声の有無を問わない。映画、ビデオ、ビデオゲーム（3D グラフィックスを使用したゲームを含む）などが該当する。3D 動画は除く。また、動画の地図は除く。 参照: 三次元動画

<p>参照: 地図動画</p>
<p>三次元動画 three-dimensional moving image</p> <p>視覚認識する三次元の動的な画像表現に適用する。音声の有無を問わない。3D 映画、ステレオスコピック 3D ビデオゲームなどが該当する。3D グラフィックスを使用したビデオゲームは除く。</p> <p>参照: 二次元動画</p>
<p>三次元資料 three-dimensional form</p> <p>視覚認識する三次元形状の表現に適用する。彫刻、模型、自然物、標本、ホログラムなどが該当する。立体地図、地球儀は除く。</p> <p>参照: 三次元地図</p>
<p>三次元資料（触知） tactile three-dimensional form</p> <p>触覚認識する三次元形状の表現に適用する。立体地図などは除く。</p> <p>参照: 三次元地図（触知）</p>
<p>話声 spoken word</p> <p>聴覚認識する言語表現に適用する。朗読、話芸、ラジオドラマ、演説、インタビューなどの録音が該当する。また、コンピュータ発話なども該当する。映像を伴う場合は除く。参照: 二次元動画</p> <p>参照: 三次元動画</p>
<p>演奏 performed music</p> <p>聴覚認識する音楽表現に適用する。録音された音楽演奏、コンピュータ音楽などが該当する。映像を伴う場合は除く。</p> <p>参照: 二次元動画</p> <p>参照: 三次元動画</p>
<p>音声 sounds</p> <p>話声または演奏を除く、聴覚認識する表現に適用する。自然音、人工音のいずれも該当する。映像を伴う場合は除く。</p> <p>参照: 二次元動画</p> <p>参照: 三次元動画</p>
<p>コンピュータ・データセット computer dataset</p> <p>コンピュータ処理用にデジタル・コード化したデータセットに適用する。平均、相関などの計算やモデル作成のため、アプリケーション・ソフトウェアに使用される数値データ、統計データなどが該当する。コンピュータ処理用の地図データは除く。また、視覚認識または聴覚認識するデータは除く。</p> <p>参照: 地図データセット</p> <p>参照: テキスト</p> <p>参照: 楽譜</p> <p>参照: 運動譜</p> <p>参照: 静止画</p> <p>参照: 二次元動画</p> <p>参照: 三次元動画</p> <p>参照: 話声</p>

参照: 演奏

参照: 音声

コンピュータ・プログラム computer program

コンピュータが処理、実行する指令をデジタル・コード化したデータに適用する。オペレーティング・システム (OS) 、アプリケーション・ソフトウェアなどが該当する。

該当する表現種別が存在しない場合は、「その他」または「other」と記録する。

該当する表現種別が容易に判明しない場合は、「不明」または「unspecified」と記録する。

(出典：同書 p388-390 の表 5.1.3 表現種別の用語)

0.2.4 アクセス・ポイントの構築

NCR2018 #0.5.4 アクセス・ポイントの構築

実体ごとに、規定に基づいて必要な属性を組み合わせ、実体に対する典拠形アクセス・ポイントと異形アクセス・ポイントを構築する。

#0.4 に挙げた機能を実現するためには、典拠コントロールを行う必要がある。当該実体を他の実体と一意に判別する典拠形アクセス・ポイントは、典拠コントロールに根幹的な役割を果たし、関連の記録にも用いる。他方、異形アクセス・ポイントは、典拠形アクセス・ポイントとは異なる形から実体を発見する手がかりとなる。

両者は、ともに統制形アクセス・ポイントである。ほかに非統制形アクセス・ポイントがある。

(参照: #21 を見よ。) (出典：同書 p27-28)

NACSIS-CAT での、典拠形アクセス・ポイント、異形アクセス・ポイントの記録は、本基準 0.1.4 を参照すること。

0.2.5 関連の記録

NCR2018 #0.5.5 関連の記録

資料や実体の発見、識別に必要な、実体間の様々な関係性を表現する、関連の要素を規定している。

関連する実体の識別子、典拠形アクセス・ポイント等によって、関連の記録を行う。要素によっては、関連の詳細な種類を示す「関連指示子」を設け、用いる語彙のリストを提示する。

(出典：同書 p28)

NACSIS-CAT での、関連の記録は、本基準 0.1.3 および適用細則を参照すること。著者名リンクでは著作・表現形と個人・家族・団体の関連の詳細な種類を示す関連指示子を使用する。

0.2.6 書誌階層構造

NCR2018 #0.5.6 書誌階層構造

体現形の構造を固有のタイトルを有する複数のレベルから成る書誌階層構造ととらえ、記述対象を任意の書誌レベルから選択できることとする。特に、形態的に独立した資料だけでなく、その構成部分も記述対象とできるよう規定した。一方で、記述対象として選択することが望ましい基礎書誌レベルについても規定している。書誌階層構造は、FRBR で規定する体現形における関連の一種（全体と部分）に相当する。一つの書誌レベルの記述において、上位書誌レベルの情報は属性の記録および関連の記録として規定し、下位書誌レベルの情報は専ら関連の記録として規定する。

（参照: #1.5.1 を見よ。）（出典: 同書 p28）

#1.5 書誌階層構造と記述のタイプ

#1.5.1 書誌階層構造

体現形は、シリーズとその中の各巻、逐次刊行物とその中の各記事のように、それぞれが固有のタイトルを有する複数のレベルとして、階層的にとらえることができる。これを書誌階層構造という。

書誌レベルは、書誌階層構造における上下の位置づけを示す。記述対象として選択することが望ましい書誌レベルを、基礎書誌レベルという。その上下の書誌レベルを、それぞれ上位書誌レベル、下位書誌レベルと定める。

データ作成者は、任意の一つの書誌レベルを選択し、体現形の記述（包括的記述または分析的記述）を作成する。

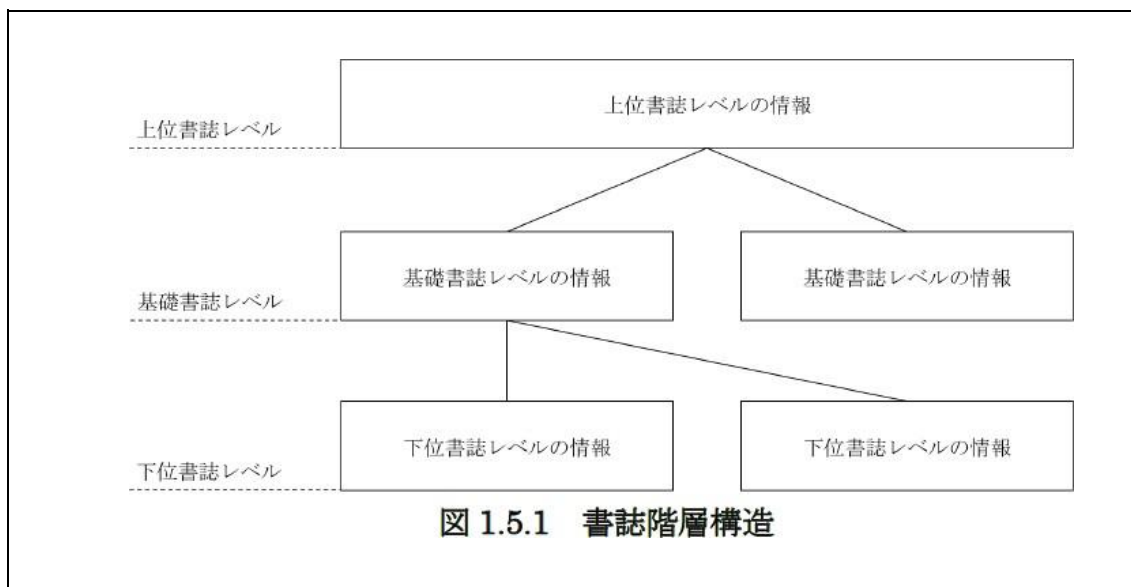
（参照: #1.5.2.1、#1.5.2.2 を見よ。）

複数の書誌レベルを選択し、それらの記述を組み合わせた階層的記述を作成することもできる。

（参照: #1.5.2.3 を見よ。）

一つの書誌レベルの記述において、上位書誌レベルの情報は、属性の記録（シリーズ表示）、および（または）関連の記録（体現形間の上位・下位の関連）として記録することができる。下位書誌レベルの情報は、専ら関連の記録（体現形間の上位・下位の関連）として記録することができる。異なる書誌レベルにそれぞれ対応した複数の記述を作成し、関連の記録によって相互に結びつけることもできる。

（参照: #43.3 を見よ。）



基礎書誌レベルについては、刊行方式に応じて、次のとおりに設定する。

a) 単巻資料

それ自体を基礎書誌レベルとする。

b) 複数巻単行資料

全体を構成する各部分が固有のタイトルを有する場合は、そのタイトルを有する部分（1巻、複数巻）を基礎書誌レベルとする。各部分が固有のタイトルを有しない場合は、全体を基礎書誌レベルとする。

c) 逐次刊行物

その全体を基礎書誌レベルとする。ただし、それぞれ独立した順序表示をもつ部編等に分かれている場合は、部編等を基礎書誌レベルとする。

d) 更新資料

その全体を基礎書誌レベルとする。

なお、固有のタイトルを有しない物理的（または論理的）な単位に記述対象を分割して扱う場合は、その単位を物理レベルとよぶ。物理レベルで記述を作成してもよい。

（出典：同書 p45-46）

書誌階層構造については、NCR2018 の#0.5.6 の参照先である#1.5.1 の説明が詳しいため、#1.5.1 も引用した。

NACSIS-CAT では、近い用語として、「物理レベル」には NACSIS-CAT の図書書誌の「出版物理単位」が、「基礎書誌レベル」には NACSIS-CAT の図書書誌の「単行書誌単位」、雑誌書誌の「逐次刊行物書誌単位」が、「基礎書誌レベル」の「上位書誌レベル」には NACSIS-CAT の図書書誌の「集合書誌単位」が、それぞれ存在する。

NACSIS-CAT の図書書誌は、単行書誌単位を記述対象とするが、データの作成単位は、出版物理単位とする。

書誌階層構造については本基準 4.3、書誌単位については本基準 4.2 を参照すること。

0.3 NCR2018 と NACSIS-CAT の用語の対応表

0.1～0.2 で概説した NCR2018 と NACSIS-CAT の用語の対応表を出現順に以下の表 0-4 にまとめる。

表 0-4 NCR2018 と NACSIS-CAT の用語の対応表

NCR2018 の用語	NACSIS-CAT の用語
著作/表現形/体現形/個別資料	(対応する用語はない)
典拠形アクセス・ポイント	著者名典拠データ、著作典拠データの典拠形アクセス・ポイント(HDNG フィールド)
異形アクセス・ポイント	著者名典拠データ、著作典拠データの「から見よ参照」(SF フィールドグループ)
(実体の属性および実体間の関連としての)エレメント	フィールドおよびフィールドのデータ要素
エレメント・サブタイプ	フィールドのデータ要素
サブエレメント	フィールドのデータ要素
コア・エレメント	入力レベルが「必須 1」、「必須 2」のフィールドおよびフィールドのデータ要素
(コア・エレメントでない)エレメント	おもに入力レベルが「選択」のフィールドおよびフィールドのデータ要素
機器種別/キャリア種別/表現種別	(対応する用語はない)
(書誌階層構造の) 物理レベル	図書書誌の出版物理単位
(書誌階層構造の) 基礎書誌レベル	図書書誌の単行書誌単位、雑誌書誌の逐次刊行物書誌単位
(書誌階層構造の) 基礎書誌レベルの上位書誌レベル	図書書誌の集合書誌単位

1 総合目録データベースの概要

総合目録データベースとは、全国の大学図書館等が所蔵する図書、逐次刊行物等についての目録所在情報をデータベース化したものである。(目録所在情報データベース)

1.1 総合目録データベース形成の目的

総合目録データベース形成の目的は、次の 2 点である。

- 書誌情報の共有を行い、大学図書館等における目録業務の負担を軽減すること
- 形成された目録所在情報によって、資料の共用を促進すること

1.2 総合目録データベースの形成方法

総合目録データベースは、その形成方法として、次のような特徴を有している。

- データ入力は、各大学図書館等が共同分担方式で行うこと
- 書誌情報は、各大学図書館等で共有すること
 - 各国の全国書誌 MARC 等を導入し、データ入力に利用すること総合目録データベースの形成が、同時に大学図書館等の目録データベースの構築につながる

共同分担入力の主体は、学術情報ネットワークに加入する大学図書館等である。ただし、雑誌データベースについては、1953-2001年に冊子体が刊行されていた学術雑誌総合目録編集事業の結果も含まれる。

1.3 総合目録データベースの環境

我が国の大学図書館等においては、各種の標準的な目録規則が使用されており、さらに、目録業務において、国立図書館等が頒布する MARC 等を利用することも定着している。

一方、総合目録データベースにおけるデータ入力の標準化は、各種目録規則、MARC 間の異同を超越した一定の枠組みの中で実現が可能となるものである。

総合目録データベースの環境設定に当たっては、これらの点を十分にふまえた設計がなされている。

1.3.1 MARC

MARC とは、各国の国立図書館等が作成する全国書誌、典拠情報等の機械可読目録 (Machine Readable Catalog) のことである。

USMARC, JPMARC 等の各種 MARC は、総合目録データベースとは異なるフォーマットでデータが作成されているが、PREBOOK データセット、参照データセットへの格納の際に、それらの違いを吸収できるような仕組みとなっている。

フォーマットの異なる各種 MARC を同時に一つのシステムの中で利用できることは、目録システムの大きな特徴である。

1.3.2 参照データセット

参照データセットとは、MARC を総合目録データベースのデータセット形式に合わせて

変換したものである。図 1-1 において、MARC と参照データセットを結ぶ情報の流れは、MARC から各参照データセットへの、フォーマット変換とデータロードを表している。

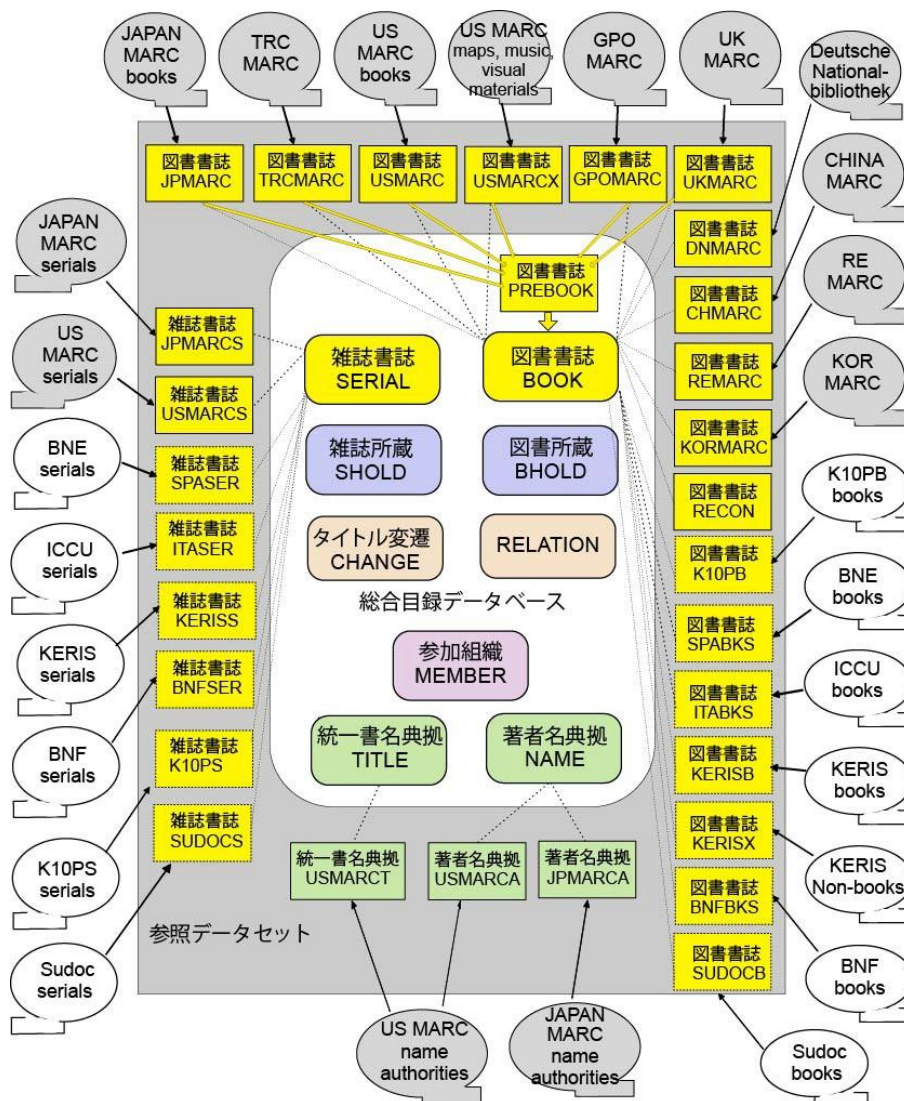
参照データセットは、総合目録データベースの形成を支援するために設置された「参照」のためのデータセットである。参照データセット（及び MARC）は、互いに連関した総合目録データベースの内部ではなく、参照という形で外部に位置づけられている。

1.3.3 総合目録データベース

図 1-1 において、参照データセットと総合目録データベースを結ぶ情報の流れは、参照データセット中のデータを利用して総合目録データベースにデータ（書誌、典拠）を作成することを表している。

なお、総合目録データベース中の各データは、後述するように、相互に連関し、全体として総合目録データベースを形成している（本基準 2.1）。

図 1-1 データベース構成図



2 総合目録データベースの構造

2.1 データセット構成

総合目録データベースは、書誌、所蔵、典拠、タイトル変遷、RELATION、及び参加組織のデータセットで構成される。

書誌データセット (BOOK, PREBOOK, SERIAL) は、参加組織が所蔵する図書、又は逐次刊行物の書誌情報を記録するためのものである。

所蔵データセット (BHOLD, SHOLD) は、各参加組織の所蔵情報を記録するためのものである。

典拠データセット (NAME, TITLE) は、個人・家族・団体および著作の典拠形アクセス・ポイントやその他の情報を記録するためのものである。

タイトル変遷データセット (CHANGE) は、雑誌のタイトル変遷にかかわる情報を記録するためのものである。

RELATION データセット (RELATION) は、並立の関係にある図書書誌データ同士の ID を管理するためのものである。

参加組織データセット (MEMBER) は、目録システムの参加組織にかかわる情報を記録するためのものである。

これらのデータセットは、図 2-1 のように、相互に関連しつつ、目録所在情報を表現する。

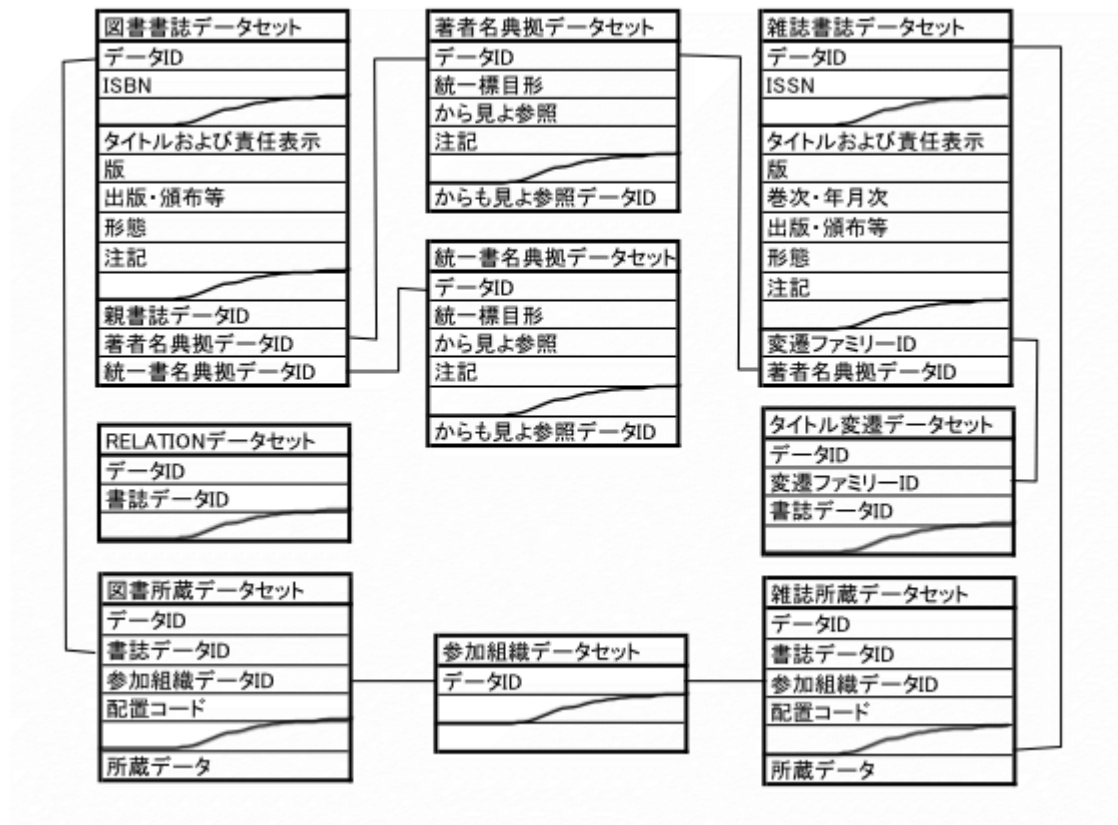


図 2-1 データセット関連図

データセットの構造及び関連は、図 2-2 のように NCR2018 の概念モデルにあてはめることができる。

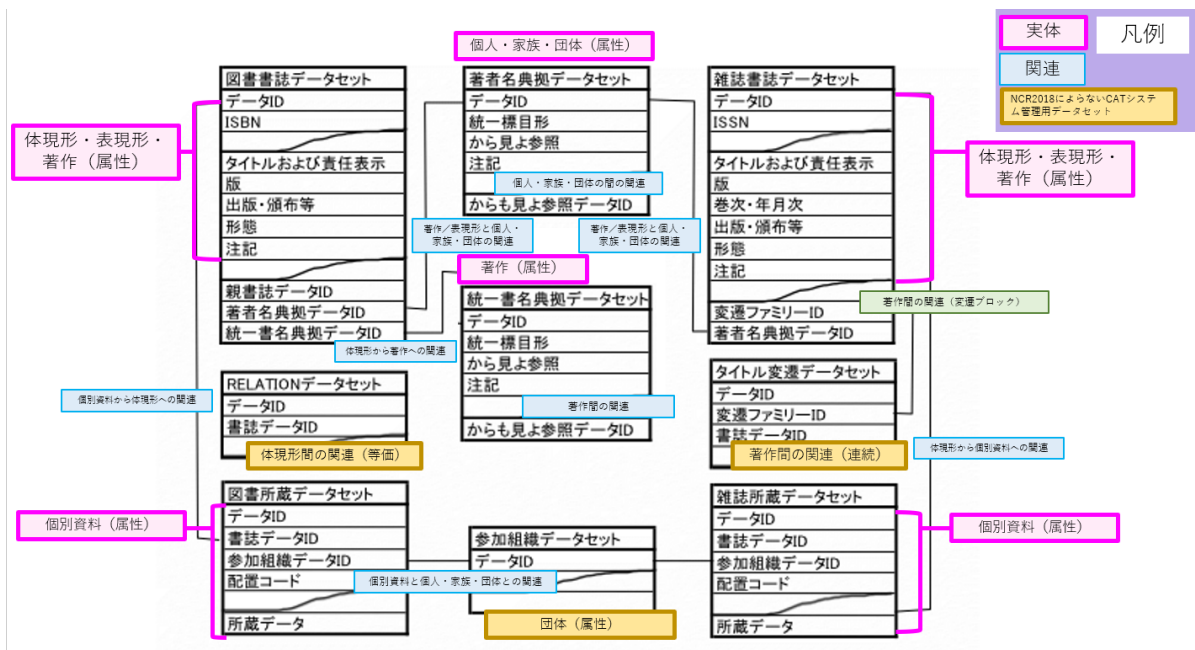


図 2-2 NCR2018 概念モデルデータセット関連図

2.2 書誌データセット

書誌データセットは、参加組織の共有データセットであり、資料の書誌情報を管理するためのものである。

書誌データセットには、図書書誌データセット（BOOK 及び PREBOOK）、雑誌書誌データセット（SERIAL）がある。これらのデータセットには、それぞれ、本基準 2.2.1 によって区分される資料の書誌情報を収録する。

2.2.1 図書と逐次刊行物

本基準において図書とは、いわゆる図書及びパンフレット等の印刷資料には限定せず、さまざまな資料形態の単行資料全てのことをいう。また、逐次刊行物とは、資料形態の種別にかかわらず、終期を予定せずに逐次刊行される資料全てのことをいう。両者の区別は、対象となる資料の刊行方式にのみかわる。なお、本基準においては、逐次刊行物を雑誌とも呼ぶ。

モノグラフシリーズ等、両者の境界領域の資料は、双方のデータセットにデータを作成することが望ましい。すなわち、図書データセットに一つ一つのモノグラフのデータを、また、雑誌データセットにモノグラフシリーズ全体のデータを作成する。

ただし、境界領域の資料について、参加組織が一方のデータのみを作成する場合は、以下の基準によることができる。

- 原則として図書扱いとするもの
モノグラフシリーズ，刊行頻度の極度に低い逐次刊行物，差し替えを行うルーズリーフ出版物，等
- 原則として雑誌扱いとするもの
年報（モノグラフシリーズを除く），年鑑，要覧，Advance もの，等

解説（図書書誌データセットと雑誌書誌データセットの違い）

図書書誌データセットにおいては，個々の巻号の単位がデータ作成単位となる。

一方，雑誌書誌データセットにおいては，データ作成単位は逐次刊行物書誌単位であり，個々の巻号の情報は記録されない。

従って，境界領域の資料の個々の巻号に固有のタイトルが存在する場合，個々の巻号の単位の書誌情報の記録・検索を保証するために，図書扱いが望ましいことになる。

2.2.2 書誌データ

書誌データは，資料についての書誌的記録である。

書誌的記録とは，資料のタイトル，著者，版等の記録であり，これによって，他の資料との区別や，同一であることの確認を行うためのものである。

(1) データ作成単位

図書書誌データセットにおいては，出版物理単位ごとにデータを作成する。一つの資料に対して，最上位の書誌単位のデータと最下位の書誌単位のデータを作成することができるが，最上位の書誌単位のデータの作成は任意である。

雑誌書誌データセットにおいては，出版物理単位毎ではなく，逐次刊行物のタイトル単位のデータのみを作成する。個々の巻号の情報は記録されない。

(2) 情報源

書誌データは，原則として，各参加組織が所蔵する記述対象資料に基づいて作成する。

(3) 他のデータとの関係

図書書誌データは，シリーズとその個々の資料の関係等を示すために，他の書誌データとの間にリンクを形成することができる。

また，雑誌書誌データは，タイトル変遷関係を示すために，タイトル変遷データとの間にリンクを形成する。

書誌データは，著者からの集中機能を果たすために，著者名典拠データとの間にリンクを形成することができる。

また，図書書誌データは，著作からの集中機能を果たすために，著作典拠データとの間にリンクを形成することができる。

書誌データは，個々の資料の所蔵状況を示すために，所蔵データとの間にリンクを形成する。ただし，図書書誌データセットのうち，PREBOOK データセットの書誌データは，

所蔵登録をすることでBOOK データセットに移行するため、対応する所蔵データが存在しない。

2.3 所蔵データセット

所蔵データセットは、書誌データセット及び典拠データセットと異なり、参加組織の所蔵等に関する個別の情報を管理するためのものである。

所蔵データセットには、図書所蔵データセット (B HOLD) , 雑誌所蔵データセット (S HOLD) がある。

2.3.1 所蔵データセットの収録対象

図書所蔵データセットには、図書書誌データセット (BOOK データセット) に対応した資料毎の所蔵情報を収録する。

雑誌所蔵データセットには、雑誌書誌データセットに対応した一連の巻号次の所蔵情報を収録する。

2.3.2 所蔵データ

所蔵データには、参加組織における資料の所蔵状況及び書誌データには記録できない各参加組織固有の情報を収録する。

- データ作成単位

所蔵データは、1 書誌データに対し、かつ各参加組織の配置コード毎に、1 データを作成する。複数のデータ作成は、許容されない。

- 物理単位

第 5 版適用以前に作成された複数の VOL グループを持つ書誌データ及び例外的に複数の VOL グループを持つことを認められた書誌データ (4.3.2 参照) については、その数だけ所蔵データの物理単位フィールドを繰り返すことができる。

- 他のデータとの関係

データの登録を行うと、所蔵データと書誌データとの間のリンク形成が行われる。また、このリンク形成が PREBOOK データセットの書誌データに対して行われた場合、当該書誌データは BOOK データセットに移行する。

2.4 典拠データセット

典拠データセットは、参加組織が共有しているデータセットであり、書誌的記録の検索において集中機能を実現するために、典拠形アクセス・ポイントを管理するものである。

典拠データセットには、著者名典拠データセット (NAME) , 著作典拠データセット (TITLE) がある。

2.4.1 典拠データセットの収録対象

著者名典拠データセットには、著者の典拠形アクセス・ポイントとなる名称を収録する。名称には、個人名、家族名、団体名及び会議名がある。

著作典拠データセットには、著作の典拠形アクセス・ポイントとなる著作の名称を収録する。

2.4.2 典拠データ

典拠データには、典拠形アクセス・ポイント及び典拠形アクセス・ポイントに関連する情報を記録する。

(1) データ作成単位

典拠データは、同一著者（個人、家族、団体及び会議）、あるいは同一著作に対し、1データを作成する。

ただし、目録規則に規定されている場合は、同一個人等に対し、関連する複数のデータを作成することがある。

(2) 典拠形アクセス・ポイントと異形アクセス・ポイント

典拠データの主たる要素である典拠形アクセス・ポイントは、本基準及び目録規則に従って作成する。目録用言語によってアクセス・ポイントの形が異なる場合は、典拠形アクセス・ポイントの他に、別の形のアクセス・ポイントを異形アクセス・ポイントの一つとして、から見よ参照（SF）に記録することができる。

また、本基準、又は目録規則によらない各参加組織独自のアクセス・ポイントの形は、所蔵データに記録することができる。

(3) 他のデータとの関係

典拠データは、通常、一つ以上の書誌データとの間にリンク形成が行われている。

また、からも見よ参照（SAF）が存在する場合は、対応する典拠データとの間にリンクを形成することができる。

2.5 タイトル変遷データセット

タイトル変遷データセット（CHANGE）は、逐次刊行物のタイトルの変遷関係を示すためのものである。このデータセットは、国立情報学研究所におけるタイトル変遷関係の確証作業によって構築される。

2.5.1 タイトル変遷データ

タイトル変遷データは、複数の雑誌書誌データとの間にリンク形成が行われている。

2.6 RELATION データセット

RELATION データセット（RELATION）は、並立の関係にある図書書誌データ同士のIDを管理するためのものである。このデータセットは、国立情報学研究所において機械処

理によって構築される。

2.7 参加組織データセット

参加組織データセット (MEMBER) は、参加組織及び配置コードに関する情報を管理するためのものである。

参加組織とは、「国立情報学研究所目録所在情報サービス利用規程（平成 16 年 4 月 1 日 制定）」の定めるところにより、国立情報学研究所に目録所在情報サービスの利用を申請し、承認された図書館等のことである。

各図書館等は、必要に応じて、複数の参加組織を設定することができる。

配置コードとは、目録システムに登録された、各参加組織における図書室等、配置場所の名称の略語形である。

1 参加組織内に複数の図書室等があり、それらを識別する必要がある場合は、複数の配置コードを設定することができる。

2.8 リンク関係

図 2-1 で各データセット間を結ぶ線は、リンク関係を表したものである。

リンク関係の表現は、実際には各データの特定のフィールド（リンクフィールド）中に、リンク先データの ID が記録されることによって行われる。ID は、目録システムにおいて各データを一意的に識別するための番号であり、この番号によってリンク先データが特定されることになる。

リンク関係は、リンクフィールドが繰り返し可能である場合、1:n の関係になる。例えば、書誌データの AL フィールドは繰り返し可能であり、1 書誌に対して n 人の著者の存在が認められる。逆に、1 人の著者は、m 個の著作を著すことがある。この関係は m:1 となる。

一方、一つの所蔵データは、一つの書誌データに対してしかリンク関係を持つことができない。その意味で、書誌データと所蔵データの関係は、常に 1:n となる。

リンクで関連づけられたデータ間の関係は、データ ID 以外に、より具体的な情報をも表示することでさらに明確になる。例えば、書誌データと著者名典拠データのリンク関係では、書誌データの AL フィールドに、リンク先著者名典拠データのデータ ID と典拠形アクセス・ポイントが表示される。

データ間の関連性をリンクという方法で表現することは、総合目録データベースの大きな特徴である。また、このリンク形成によって相互のデータ検索が容易になることも、特徴の一つである。

2.8.1 書誌構造リンク

図2-1には示されていないが、図書書誌データ間のリンクとして、書誌構造リンクがある。

書誌構造リンクは、シリーズ又はセットものにおける各冊の書誌単位と、全体を表す書誌単位のそれぞれについてデータを作成し、前者（子書誌データ）から後者（親書誌データ）に対してリンク形成を行うものである。ただし、この書誌構造リンクは、必須ではない。

2.8.2 所蔵リンク

図2-1で書誌データセットと所蔵データセットを結ぶ線で示されているのが、所蔵リンクである。

所蔵リンクは、資料の書誌的記録と、参加組織における所蔵状況のそれぞれについてデータを作成し（書誌データ、所蔵データ）、両者の間でリンク形成を行うものである。この関係づけは、総合目録の本来の機能である所在情報サービスに相当する。

2.8.3 著者名リンクと著作リンク

図2-1で書誌データセットと著者名典拠データセット、図書書誌データセットと著作典拠データセットを結ぶ線で示されているのが、それぞれ著者名リンク、著作リンクである。

著者名リンクは、資料の書誌的記録と、著者の典拠形アクセス・ポイント等の情報のそれぞれについてデータを作成し、書誌データから著者名典拠データに対してリンク形成を行うものである。

また、著作リンクは、資料の書誌的記録と、著作の典拠形アクセス・ポイント等の情報のそれぞれについてデータを作成し、書誌データから著作典拠データに対してリンク形成を行うものである。

これらの関係づけは、典拠コントロールに相当する。ただし、雑誌書誌データセットにおいては、著作名によるコントロールの意味はないと考えられるので、著作リンクは形成しない。

2.8.4 からも見よ参照リンク

図2-1には示されていないが、著者名典拠データ間のリンク、又は著作典拠データ間のリンクとして、からも見よ参照リンクがある。

からも見よ参照リンクは、例えば、名称を使い分けて著作を著す人物や、名称を変更した団体に対して作成される複数の著者名典拠データ間で、相互にリンク形成を行うものである。著者名としては別個であるが相互に参照関係があることを、リンク関係で表現するわけである。

なお、「からも見よ参照」に似たものとして「から見よ参照」があるが、これは、データ間の関連としてではなく、1データ内で表現する。

2.8.5 タイトル変遷リンク

図2-1で雑誌書誌データセットとタイトル変遷データセットを結ぶ線で示されているのが、タイトル変遷リンクである。

タイトル変遷リンクは、逐次刊行物の書誌的記録と、タイトルの変遷関係のそれぞれについてデータを作成し（雑誌書誌データ、タイトル変遷データ）、両者の間でリンク形成を行うものである。

3 総合目録データベースの運用

3.1 データ作成

データ作成とは、総合目録データベースに新たにデータを作成、登録することである。データ作成の方法は、手動による流用入力、新規入力、システムによって自動的に行われるシステム登録の三通りである。

1. 流用入力
2. 新規入力
3. システム登録

3.1.1 流用入力

流用入力とは、参照データセットもしくは総合目録データベース中のデータを利用して新たなデータの登録を行うことである。

総合目録データベースもしくは参照データセットを検索して得たデータは、必要に応じてデータ修正を行い、総合目録データベースに登録を行うことができる。

3.1.2 新規入力

新規入力とは、総合目録データベースにも参照データセットにも該当するデータ、又は流用入力可能なデータが存在しない場合に、全く新たなデータを作成し、総合目録データベースに登録を行うことである。

3.1.3 システム登録

システム登録とは、外部機関作成データを総合目録データベースのPREBOOKデータセットにあらかじめ機械的に登録することである。

解説（図書書誌データのシステム登録）

図書書誌データセットにおけるシステム登録とは、外部機関作成書誌データをPREBOOKデータセットに機械的に登録することを指す。

3.2 リンク形成

データ間のリンク関係は、本基準 2.8 に示したとおりである。

リンク形成には、書誌データと所蔵データ間のリンクのように自動的に行われるものと、リンク形成の操作を行うものがある。

リンク形成の操作はいずれも任意であり、次のものがある。

1. 子書誌データと親書誌データ間のリンク
2. 書誌データと著者名典拠データ間のリンク
3. 図書書誌データと著作典拠データ間のリンク
4. 典拠データと典拠データ間のリンク

なお、タイトル変遷リンクについては、参加組織からの報告に基づき、国立情報学研究所で作成する。

3.2.1 リンク形成

リンク形成は、リンク先データが既に書誌データセット又は典拠データセット中に存在するか否かによって、その後の操作が異なる。

1. 該当データが存在する場合は、単なるリンク形成のみを行う
2. 該当データが存在しない場合は、まずリンク先データの作成を行い、その後にリンク形成を行う

3.2.2 リンク形成に先立つデータ作成

リンク先データが総合目録データベース中に存在しない場合、リンク形成の前にデータ作成を行う必要がある。（本基準 3.1 参照）

3.3 所蔵データのみの作成

総合目録データベース中に該当する書誌データが存在する場合は、所蔵データのみの作成、登録を行う。ただし、任意とされているリンク形成の操作等の修正を行うことも可能である。（本基準 3.2 参照）

3.4 総合目録データベースの品質管理

3.4.1 品質管理の段階

総合目録データベースの品質管理は、三つの段階で行われる。

- データ登録時の点検作業
- データ利用時点での誤り発見
- 国立情報学研究所による品質管理

解説（国立情報学研究所の役割）

国立情報学研究所における品質管理は、総合目録データベースの全データを点検することが物理的に不可能であり、また、資料そのものを所蔵していないという制約のため、ごく限られたものとならざるをえない。国立情報学研究所の役割は、次のようなものとなる。

- 目録情報の基準，コーディングマニュアル等，データ入力の基準類の整備及び維持
- 管理システム操作法，基準等の目録担当者への周知，教育
- 総合目録データベースの品質調査と問題点の解明，品質維持のための対策
- 総合目録データベースの品質維持のための研究開発とシステム開発
- 限定された範囲内での入力データの品質確認作業
- 重複データと判断されたもののデータの統合

3.4.2 データ入力作業と点検

データ作成に当たっては、総合目録データベースを十分に検索し、重複データの作成を可能な限り回避するよう留意する必要がある。

また、データ入力を行った後は、登録するデータに誤りがないか否かを点検する必要がある。

解説（データ入力作業と点検）

総合目録データベースへのデータ入力は、原則として、各参加組織において行われるが、PREBOOK データセットについては、外部機関作成書誌データが機械的に登録され、その後所蔵を登録する際に各参加組織においてデータ確認が実施される。各参加組織においては、通常、記述対象資料が手元にあるので、最も正確にデータを把握することが可能である。

また、当初から正確なデータを入力することが、品質管理の上で最も効果的かつ効率的である。

データ入力担当者は、本基準，目録規則，コーディングマニュアル，システム操作法等を十分に理解する必要がある。

3.4.3 共有データの修正

データの修正とは、本基準 3.1.1 で言及した流用入力時のデータ修正とは別のものであり、既に作成、登録済の総合目録データベース中のデータについて、内容の修正（追加、削除を含む）を行うことである。

原則

総合目録データベースの共有データは、最初に入力されたデータをできる限り尊重する。すなわち、既に記録されたデータは、誤りがない限り、原則として、修正を行うことはない。ただし、項目内容の追加（入力レベルが選択である項目や、複数の項目内容が存在する項目等）は、必要に応じて行うことができる。

データ修正に当たっては、そのデータが異なる対象を表現することにならないよう、慎重な操作が必要である。

なお、詳細な修正指針については、コーディングマニュアルで定める。

4 図書書誌データ

4.1 図書書誌データの構成と記述規則

各項目中のデータ要素は、原則として ISBD (International Standard Bibliographic Description) (ISBD に対応しない項目についても類似の形式) に従って記述する。

4.1.1 ID & コードブロック

このブロックは、次の諸要素からなる。

- 目録規則上は記述の一部として記録されることになっているが、コードブロックにフィールドを独立させた項目
一般資料種別コード、特定資料種別コード、国際標準図書番号、国際標準逐次刊行物番号
- 出版物理単位の表現を行うための項目群 (*)
巻次等、国際標準図書番号、価格/入手条件、(取消/無効 ISBN)
- その他のコード化情報
刊年、出版国コード、言語コード、その他の標準番号等
- 管理用フィールド
データ ID 等

*の項目は、和古書、漢籍、西洋古典籍等、記述対象の資料毎に所蔵館が書誌データを作成し、その書誌データが他館で活用されることを前提としない資料、多巻物であっても情報源が先頭の巻など 1 か所にしかないマイクロ形態資料等で、複数の出版物理単位が表現されている場合は、対になって繰り返すことができる。

なお、コード類は、原則として、USMARC フォーマットのコード体系に準拠する。

4.1.2 記述ブロック

このブロックは、目録記入の記述の部分に相当する。

- 目録記入の伝統に則って用意された項目
タイトル及び責任表示に関する事項、版に関する事項、出版・頒布等に関する事項、形態に関する事項等
- 検索を意識し、データの索引化を考慮した項目
その他のタイトル、内容著作注記

各フィールドのデータは、ISBD 区切り記号法に準拠して記述するが、各データ要素の機械的識別のため、一部の記号法を改変して使用するところがある。

データの記述に当たって適用する目録用言語は、原則として日本語資料、中国語資料、韓国・朝鮮語資料については日本語、左記以外の資料については英語とする。

ただし、PREBOOK データセット中の書誌データや参照データセットからの流用入力によって作成された書誌データは、作成元の目録規則に基づいた記述を許容する。

4.1.3 リンクブロック

このブロックには、以下の項目がある。

1. 書誌構造リンク

書誌構造の下位データから上位データに対するリンク形成に使用する

2. 著者名リンク

著者名典拠データに対するリンク形成に使用する

3. 著作リンク

著作典拠データに対するリンク形成に使用する

これらの項目では、目録作業時に他のデータとのリンク形成を行う。リンク形成後、各項目にはリンク関係の情報が示される。

ただし、リンク形成を行わない場合、これらの項目は、本基準の 4.2.1-3 集合書誌単位で定める共通のタイトル等や、8 著者名典拠データ、9 著作典拠データの項で定める典拠形アクセス・ポイントを記録するために使用する。

4.1.4 主題ブロック

このブロックでは、標準的な書誌分類及び件名等を記録する。

分類については、書誌分類であって、書架分類ではないことに注意する。すなわち、個々の図書館等の独自の情報である書架分類は、書誌データではなく所蔵データに記録する。

4.2 記述対象のとらえ方

4.2.1 物理単位と書誌単位

記述の単位は、次の 3 種類としてとらえられる。

1. 出版物理単位

個々の資料の単位、すなわち、破損しない限り一まとまりのものを物理単位と呼ぶ。この意味では、ある図書館の資料と別の図書館の資料、それぞれの資料の複本等は、全て別の物理単位である。各参加組織のシステム、特に閲覧、貸出等のサブシステムにおいては、物理単位の管理が問題となる。

しかし、総合目録データベースという共有情報のレベルでは、物理単位の情報をも保持した上で管理することは、効率的ではないため、物理単位の集まりを「複本」としてグループ化したものを、出版物理単位としてまとめる。これにより、ある図書館の資料と別の図書館の資料、また、それぞれの複本同士は同一の出版物理単位として捉えることが可能

になる。一方、ある資料の上巻と下巻は、別の出版物理単位として捉えられる。

2. 単行書誌単位

形態的に独立した単行資料で、それ自身の固有のタイトル、著者、版等によって書誌的に他と区別できる資料に対応する書誌的記録を単行書誌単位という。

単行書誌単位には、次のものが該当し、物理的に1冊の単行資料の場合、書誌単位は出版物理単位と一致する。

- 物理的に1冊の単行資料
- 出版の都合等で分冊刊行されている資料（「上」「下」のように、各巻が独自のタイトルを持たないもの）の全体

3. 集合書誌単位

物理的に複数の資料からなり、個々の資料が2と同様の観点から書誌的に他と区別でき、同時に、全体としても共通のタイトル、著者等によって書誌的に他と区別できる場合に、この全体に対応する書誌的記録を集合書誌単位という。また、個々の資料は単行書誌単位に相当する。

集合書誌単位には、次のものが該当する。

- シリーズ
- 全集、講座等のセットもの

集合書誌単位は、多段階の階層構造をとることがある。

複数の単行書誌単位、又は集合書誌単位が共通のタイトル等によってさらにまとめられる場合、そのまとまりは、上位の集合書誌単位という。

解説（書誌構造）

出版物理単位又は単行書誌単位と集合書誌単位によって形成される階層関係を書誌構造という。

階層関係は、多段階となることがある。この場合、階層の上下関係の観点から、上位の書誌単位を親書誌単位（集合書誌単位）、下位の書誌単位を子書誌単位と呼ぶ。

また、最上位と最下位の中間に位置する書誌単位を、中位の書誌単位と呼ぶ。

解説（書誌階層と書誌構造）

書誌単位の階層関係は、1階2階というような絶対的なものでなく、ある書誌単位は他の書誌単位にとって上位の単位であるが別の書誌単位にとっては下位の単位となりうる、という意味で相対的である。この点を強調するため、本基準では、書誌構造という表現を用いている。

4.2.2 図書書誌データの作成単位

図書書誌データの作成単位は、以下の基準による。

図書書誌データは、原則として、出版物理単位毎に作成する。最上位の集合書誌単位の作成は必要に応じて行う。中位の書誌単位の記録は、出版物理単位毎のデータにおいて行う。

図書書誌データは、版毎に別の書誌データを作成する。個々の図書館の所蔵する資料の刷の相違を示す情報は、必要があれば所蔵データに記録する。

和古書、漢籍、西洋古典籍等 については、記述対象資料毎に別の書誌データを作成する。

複製資料は、原則として、原本とは別の書誌データを作成する。ただし、原本代替資料・注文生産による複製資料については、同一資料から同一の方法で作成されたものであれば別の書誌データを作成しない。

図書書誌データは、資料種別毎に別の書誌データを作成する。

解説（書誌作成単位）

第5版適用以降は書誌データの作成単位を単行書誌単位ではなく出版物理単位とする。すなわち、固有のタイトル、著者、版、資料種別、書誌構造等によって書誌的に他と区別できる単行書誌単位であり、単行書誌単位が複数の出版物理単位により構成されている場合は、出版物理単位毎に作成する。（例1）

第5版適用以前に作成された図書書誌データには、複数のVOLフィールドで複数の出版物理単位を表現しているデータがあるが、ここに新たにVOLフィールドを追加してはならない。

なお、第5版適用以前に作成された既存のデータに関して、単行書誌単位の書誌データを出版物理単位毎に分割した形で、新規に書誌データを作成してもよい。

（例1）

<p><1> VOL:上 ISBN:... TR:思考への34階梯 PUB:東京:公論社, 1977.4 PHYS:229p ; 20cm</p>

<p><2> VOL:下 ISBN:... TR:思考への34階梯 PUB:東京:公論社, 1977.7 PHYS:174p ; 20cm</p>

したがって、上と下を一つの書誌単位とする次の（例2）は誤りである。

(例2)

```
<3>
VOL:上 ISBN:...
VOL:下 ISBN:...
TR:思考への34階梯
PUB:東京：公論社，1977
PHYS:2冊；20cm
```

第5版適用以前は、書誌作成単位を単行書誌単位としていたため、この時期に作成された書誌は(例2)のようになっている。しかし、第5版適用以降は、(例1)のようにVOLに異なる巻次等をもつそれぞれのデータを作成する。

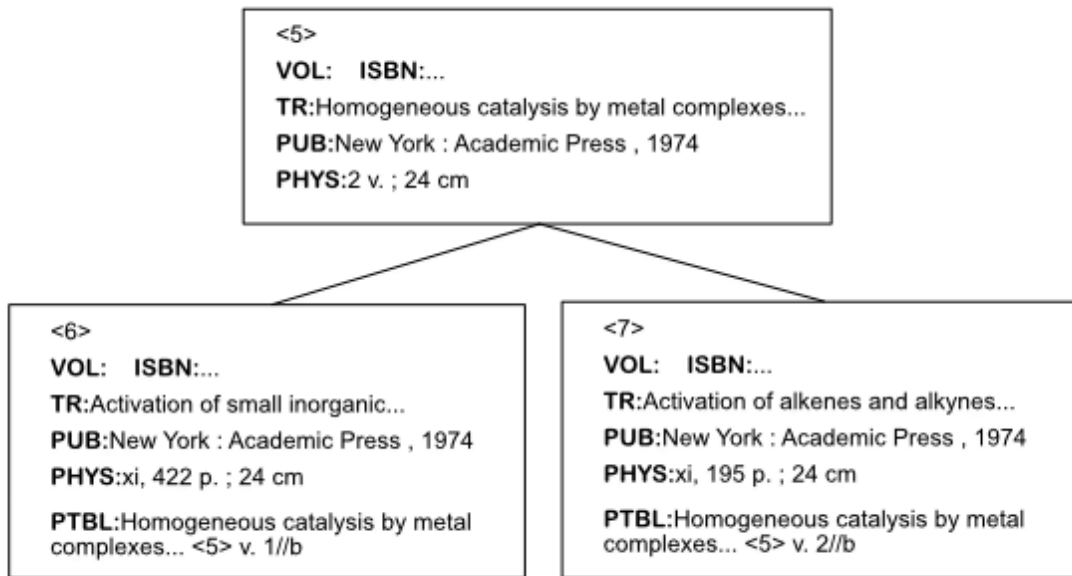
また、参照データセット(USMARC等)においては、上位の書誌単位で一つのデータにまとめられていることがある。(例3)

(例3)

```
<4>
VOL: ISBN:...
TR:Homogeneous catalysis by metal complexes...
PUB:New York : Academic Press , 1974
PHYS:2 v. ; 24 cm
CW:v. 1. Activation of small inorganic molecules
CW:v. 2. Activation of alkenes and alkynes
```

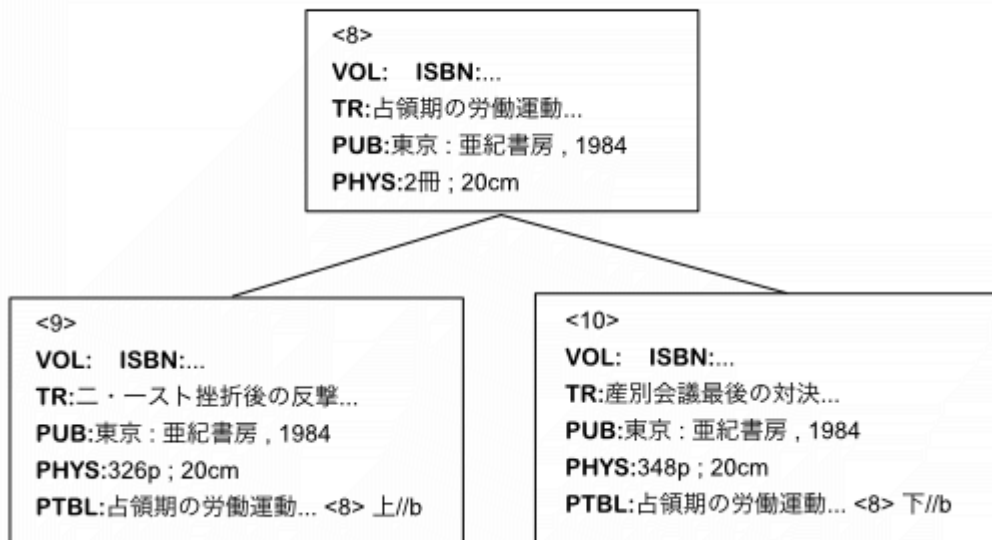
この場合は、固有のタイトルを持つものを一つの書誌単位として、別々のレコードを作成しなければならない。この時、出版物理単位と集合書誌単位のデータを作成しリンク形成する方法と、親書誌データを作成せず、PTBLにシリーズのデータ要素を記入する方法が可能である。(例4)はリンク形成した場合であり、リンク形成しない場合にはリンク先データIDは記入されない。

(例4)



(例1) のように上・下であっても、(例5) のように各巻がそれぞれの固有のタイトルも持っている場合、上・下は親書誌に対する番号等としてとらえる。

(例5)



固有のタイトルは、目録規則に規定されたタイトルの情報源からとる。したがって、標題紙等には一つのタイトルと上しか表示されていない場合は、たとえ目次に上巻のタイトルに該当する情報が表示されていても、それを上巻の固有のタイトルとしてはならない。

また、固有のタイトルでない上や下が集まっても固有のタイトルにはならない。(例6) のVOL に記録されたデータは固有のタイトルではない。

(例6)

<11> VOL:26: 京都府. 上: 総説・地名編 ISBN:... TR:角川日本地名大辞典...	<12> VOL:27: 京都府. 下: 地誌編・資料編 ISBN:... TR:角川日本地名大辞典...
--	---

解説 (固有のタイトルでないもの)

何が固有のタイトルであるかを示すことは、容易ではない。そこで、ここでは、その名称をもって書誌単位とすることができないもの、すなわち「固有のタイトルでないもの」の範囲を示すことにする。

固有のタイトルでないものとは、分冊刊行されたものの出版物理単位 (又は下位レベルの書誌単位) に対して与えられた名称である。

各分冊を区別するために与えられた名称には、順序付けのためのものと、それ以外のものがある。

本基準では、前者を「巻次等」、後者を「部編名」と呼ぶ。

「巻次等」の種別は、(第1表)に示すとおりである。

(第1表)	
種別	具体例
A 数字	1⇔2⇔3... (1) ⇔ (2) ⇔ (3) ... 一⇔二⇔三... i⇔ii⇔iii...
B かな	あ⇔い⇔う... い⇔ろ⇔は... ア⇔イ⇔ウ... ア~カサ⇔カシ~コメ...
C アルファベット	A⇔B⇔C... (a) ⇔ (b) ⇔ (c) ... A⇔Б⇔B... α⇔β⇔γ... A~Ca⇔Cb~D...
D その他の順序付けのための名称	甲⇔乙⇔丙⇔丁... 正⇔続⇔完結 別(巻, 冊) 上⇔中⇔下 大⇔中⇔小 天⇔地⇔人 乾⇔坤 前⇔後

該当する名称の前後に次のような修飾語句が付いたものは、「巻次等」である。

第, 卷, その, 内, No., 編, 篇, 集, 輯, 冊, 分冊, 部, 号, 回, 話, 次, 期, 報, 信, Lieferung (Lfg.), Part (Pt.), Volume (Vol., V.), Band (Bd.), Teil (T.), Theil (T.), tome (t.), том (т.), часть (ч.), выпуск (вып.) ...

(例) 第1巻⇔第2巻⇔第3巻...

Bd.1⇔Bd.2⇔Bd.3

また, 該当する名称の単純な組み合わせは, 「巻次等」である。

(例) A-1⇔A-2... ..第5分冊の3⇔第5分冊の4...

IV-1⇔IV-2... Ser.1, no.8⇔Ser.1, no.9...

当初の予定では単行資料であったものが, その後, 続編等を出版したために結果として順序付けが行われるようになった場合, 順序付けがなされていない出版物理単位については本来「巻次等」は存在しない。この場合, 当該出版物理単位には適切な名称を補記し, 分冊刊行された別書誌であることを明示する。

(例) [正] ⇔続⇔続々...

順序付けのための名称は, 途中で用語法が変わることがある。この場合, 全体を通しての順序付けが維持されていれば, 用語法の相違にはこだわらない。

(例) 上⇔下⇔続⇔続々⇔続々々⇔大尾 1A⇔1B⇔1C⇔1-4⇔1-5...

「別巻」, 「別冊」等は, 順序付けの体系の末尾に位置すべき名称として扱う。

(例) 第1巻⇔第2巻⇔第3巻⇔別巻

上⇔下⇔別冊

「部編名」の種別は, (第2表) に示すとおりである。

(第2表)	
種別	具体例
E 地域区分	
1 地域名等	アジア⇔アフリカ... 太平洋⇔大西洋... 華北⇔華南 北アメリカ⇔中央アメリカ⇔南アメリカ 道北⇔道東⇔道南 Portugal et Espagne⇔Nederland et Danmark
2 国名・州名等	アイスランド⇔アイルランド... テキサス⇔フロリダ... Iceland⇔Ireland⇔England...

3 都道府県名・市区町村名等	北海道⇔青森県⇔秋田県... 徳島⇔香川⇔愛媛⇔高知 横浜市⇔川崎市⇔小田原市⇔相模原市...
4 家名・藩名等	伊達家⇔上杉家... 会津藩⇔薩摩藩...
F 年代的区分	
1 時代名	奈良・平安時代⇔室町・鎌倉時代... 明治⇔大正⇔昭和 戦前⇔戦中⇔戦後 石器時代⇔青銅器時代⇔鉄器時代... Stone Age ⇔ Bronze Age... Ancient Ages ⇔ Middle Ages...
2 年月日及びその範囲	1985 年度⇔1986 年度... 1961 - 1970⇔1971 - 1975... 昭和 20 年現在⇔昭和 30 年現在 1980 年夏季⇔1980 年秋季... To 1334⇔1334-1615...
3 季節	春⇔夏⇔秋⇔冬 夏期⇔冬期 春～夏⇔秋～冬 Spring⇔Summer...
G その他の区分	
1 学校, 教科, 学年等	ようちえん⇔小学校... 国語⇔算数⇔理科⇔社会... 低学年⇔高学年 中 1⇔中 2⇔中 3⇔高 1...
2 法律等のセクション番号	§1～20⇔§21～40. . . 第 1～第 10 節⇔第 11～第 30 節. . . First course⇔...⇔Fifth course⇔Complete course
H 対になって用いられる一般的な名称	総論⇔各論 海外⇔国内 外国⇔内国 欧文⇔和文 洋画⇔日本画 和⇔漢⇔洋 口語⇔文語 人文⇔社会⇔自然 基礎⇔応用 総記⇔哲学⇔歴史⇔社会科学⇔自然科学... General⇔Particular International⇔Domestic Spoken language, Colloquial language⇔Literary language Human science⇔Social science⇔Natural science General⇔Philosophy⇔History⇔Social sciences⇔Natural

		sciences Pure mathematics⇔Applied mathematics Theoretical physics⇔Applied physics
I	形式区分を表す名称	詩歌⇔戯曲⇔小説⇔評論⇔日記... Poetry⇔Drama⇔Fiction... Tragedy⇔Comedy...
J	付録であることを示す名称	付録 追補 補遺 追録 付図 図版 図表 年表 解説 資料 索引 Supplement, annexe, Appendix, Index, Ergänzungsheft
K	付録ではないことを強調する名称	本文 本体 Text, texte

該当する名称の前後に次のような修飾語句が付いたものは、「部編名」である。
編, 篇, 巻, (の) 部...

(例) 邦楽の部⇔洋楽の部 巻・春～夏⇔巻・秋～冬
また、該当する名称の単純な組み合わせは、「部編名」である。

(例) 品川区・大田区⇔目黒区・世田谷区... 本文⇔解説・資料⇔索引
上記 E～K に該当しなくても、「編」「篇」「巻」「(の) 部」等の語句を有し、明らかに、部編名として機能している名称は、「部編名」として扱う。

(例) データベース編⇔検索編⇔登録編
解説 (巻次等及び部編名の記録)
巻次等及び部編名については、VOL フィールドに記録する。

名称が「巻次等」と「部編名」のいずれであるか不明の場合は、当該名称を「部編名」として扱う。

なお、名称が「巻次等」もしくは「部編名」であるか否かが不明の場合、すなわち、名称が固有のタイトルでないものであるか否かが不明の場合は、当該名称を固有のタイトルであるとみなす。

4.3 記述対象のデータ上での表現方法

4.3.1 書誌構造の表現

書誌構造が 2 階層の場合は、出版物理単位 of データ (子書誌データ) の PTBL フィールド

ド中に、集合書誌単位のタイトル及び責任表示、集合書誌単位に対する番号等及び構造の種類を記録する。書誌構造リンクを形成する場合は、集合書誌単位のデータ（親書誌データ）を作成し、親書誌データとリンクすることによって、子書誌データの PTBL フィールドに親書誌データの ID (PTBLID) を記録する。

書誌構造が 3 階層以上の場合は、子書誌データの PTBL フィールド中に、最上位の集合書誌単位のタイトル及び責任表示、集合書誌単位に対する番号等及び構造の種類を記録したのち、中位の書誌階層のタイトル及び責任表示等及び構造の種類を記録する。

中位の書誌単位が複数ある場合は、上位の書誌単位から順に記録する。

書誌構造リンクを形成する場合は、最上位の集合書誌単位のデータ（親書誌データ）を作成し、親書誌データとリンクすることによって、子書誌データの PTBL フィールドに、上記に追加して親書誌データの ID (PTBLID) を記録する。

書誌構造リンクを形成しない場合に、別言語形など、親書誌データの「その他のタイトル」に相当するタイトルを記録する必要があるときは、子書誌データの PTBL フィールドを繰り返して記録する。

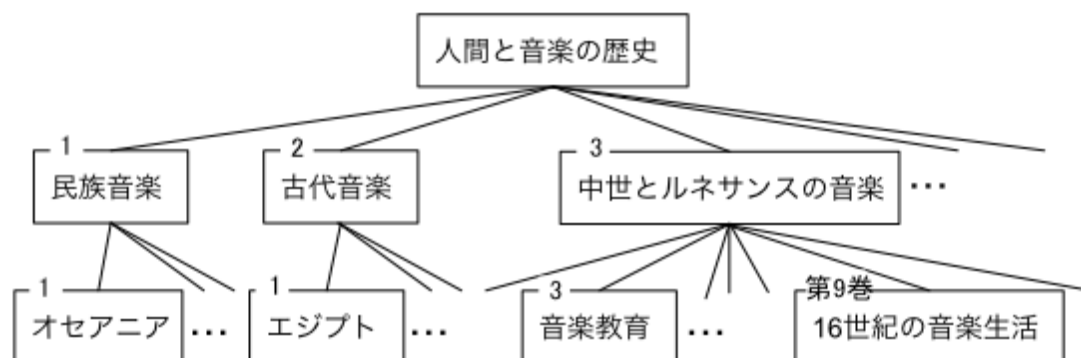
解説（構造の種類）

構造の種類は、いわゆるシリーズ扱いか、セットもの扱いかの指定を行うもので、総合目録データベースにおいてはさほどの意味を持たないが、参加組織におけるリスト等の出力に対する便宜等のために設けられた項目である。

リスト等出力の際、「シリーズ」の指定を行って親書誌データのタイトルをシリーズエリアに出力し、「セット」の指定を行って親書誌単位から順に多段階記述で出力する、というような設定を可能にする。また、各参加組織において、書架分類をセットとしてまとめた番号を付与するか、個々のタイトルで分類するかの目安として用いることもできる。

解説（3 階層以上の書誌構造）

「16 世紀の音楽生活」という出版物理単位は、「中世とルネサンスの音楽」という集合書誌単位に含まれ、さらに「人間と音楽の歴史」という上位の集合書誌単位に含まれる。



総合目録データベースでは、この書誌構造を次のように表現する。（例 7）

(例7)

<12>
TR:人間と音楽の歴史 / ヴェルナー・バッハマン編集||ニンゲント オン
ガクノ レキシ
VT:OR:Musikgeschichte in Bildern
AL:Bachmann, Werner <>

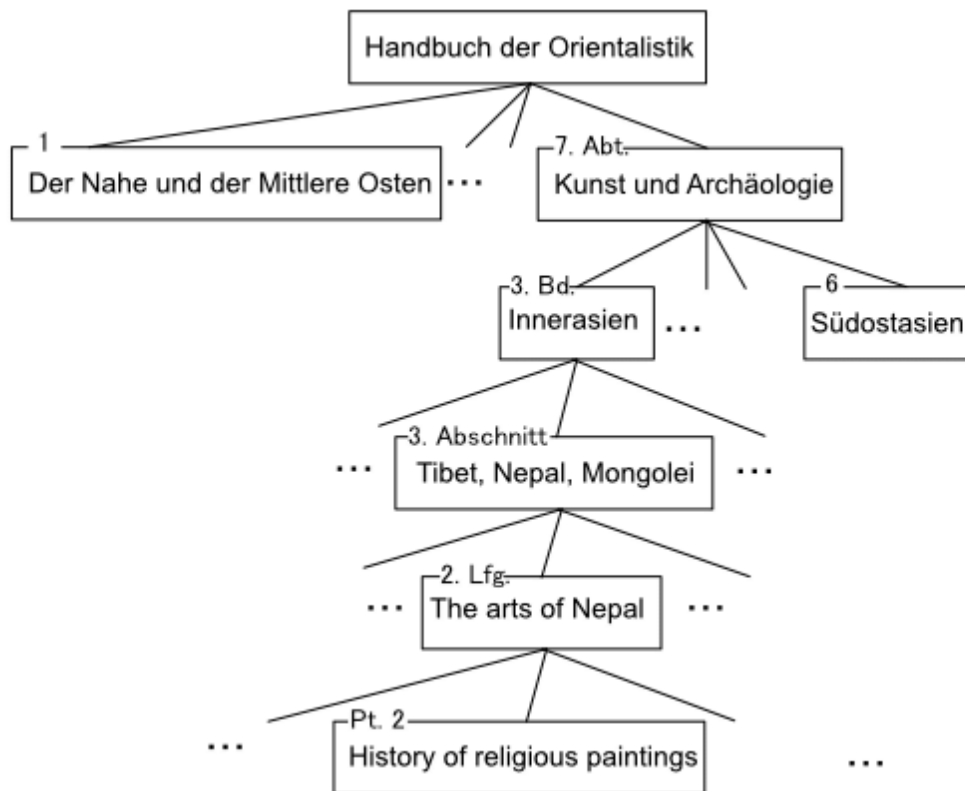
<13>
TR:16世紀の音楽生活 / ヴァルター・ザルメン著||16セイキノ オンガク
セイカツ
VT:OR:Musikleben im 16. Jahrhundert
VT:OR:Musik des Mittelalters und der Renaissance
PTBL:人間と音楽の歴史 / ヴェルナー・バッハマン編集||ニンゲント オン
ガクノ レキシ <12> 3. 中世とルネサンスの音楽||チュウセイトルネサ
ンスノ オンガク ; 第9巻//bb
AL:Salmen, Walter <>

子書誌データの PTBL フィールドの<>の後に、最上位の集合書誌単位に対する番号等、続けて中位の書誌単位のタイトル、責任表示、タイトルのヨミ及び番号等を記録する。

中位の書誌単位の情報のうち PTBL フィールドに記録できないものは、子書誌データの該当するフィールド (VT, AL, NOTE 等) に記録する。

例えば、中位の書誌単位のタイトルである「中世とルネサンスの音楽」に対する原書名「Musik des Mittelalters und der Renaissance」は、子書誌データの VT フィールドに記録する。

次の例では、中位の書誌単位を含め 6 階層の書誌構造を有するよう見えるが、「Innerasien」と「Tibet, Nepal, Mongolei」は固有のタイトルではないため、総合目録データベースにおいては中位の書誌単位は 2 単位で、書誌構造としては計 4 階層である。この場合も、中位の書誌単位の情報は子書誌データの PTBL フィールドに記録することによって、書誌構造を表現する。(例 8)



(例8)

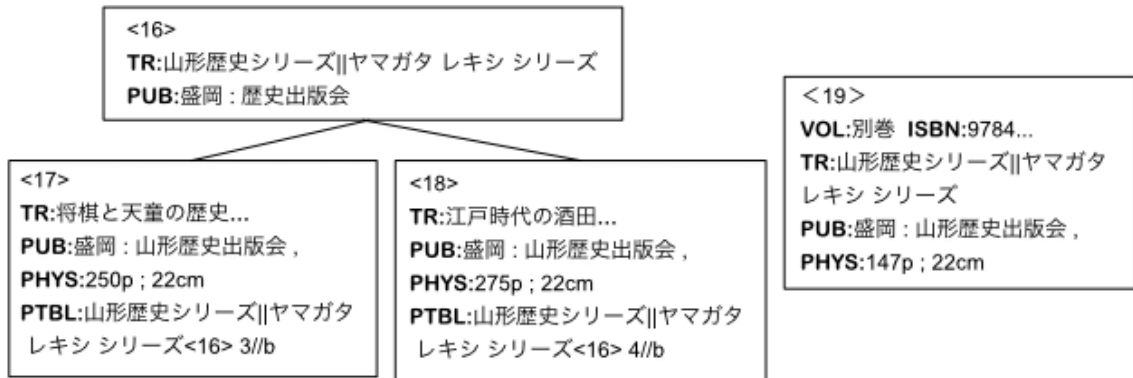


解説 (集合書誌単位のタイトルと出版物理単位のタイトル)

親書誌データは、一連の子書誌に共通するシリーズ／セットを集合書誌として関連づけるための概念的データである。従って、そこには個々の出版物理単位の情報は記述しない。

全集の別巻のように、シリーズ／セットものの中でその巻の名称だけが固有のタイトルでない場合、別巻の書誌は親書誌データとは別の書誌データを作成する。このような場合、第4版以前は親書誌データのVOLフィールドに別巻の情報を記述し、「バランスしない書誌構造」と呼んでいた。しかし、第5版適用以降は親書誌データにVOLを追加してはならない。(例9)

(例9)



第2巻までは固有のタイトルがないのに、第3巻以降固有のタイトルが付くようになった場合、各出版物理単位で書誌データを作成し、階層構造をもつ巻については別に親書誌データを作成してリンクを形成することができる。(例10)

(例10)



第4版以前は、例9、例10のような場合、書誌データの作成単位は、書誌単位と固有のタイトルの有無によって決定していた。すなわち、固有のタイトルを有するものについては子書誌データを作成し、そうでないものについては親書誌データのVOLフィールドに部編名を記述し、バランスしない書誌としていた。第5版適用以降、バランスしない書誌に対して書誌構造リンクを形成することは禁止する。書誌構造リンクを形成する場合には、新たに親書誌データを作成してリンク形成を行う必要がある。

なお、続巻が発刊されたことにより、タイトルの一部が集合書誌単位(親書誌データ)のタイトルとみなされるようになった場合も、所蔵データが登録された既存書誌データは、対応する親書誌データとはみなさない。書誌構造リンクを形成する場合には、新たに親書誌データを作成する。(例10)において所蔵登録を行う場合、「1」と「2」の所蔵データは「中心地論」の書誌データと、「3」の所蔵データは「西ドイツにおける地域政策への応用」の書誌データとリンクを形成する。

4.3.2 出版物理単位の表現

書誌データは出版物理単位毎に作成する。

例外として以下の資料については VOL グループ (VOL, ISBN, PRICE, (及び XISBN) の組) を繰り返して表現してもよい。

1) 和古書, 漢籍, 西洋古典籍等, 記述対象の資料毎に所蔵館が書誌データを作成し, その書誌データが他館で活用されることを前提とされない資料。

和古書は江戸時代まで (1868 年以前), 漢籍は辛亥革命まで (1912 年以前), 西洋古典籍はおおむね 1830 年までに書写・刊行された資料とする。

2) 多巻のものであっても情報源が先頭の巻など 1 か所にしかないマイクロ形態資料。

4.3.3 構成部分である下位書誌レベルの表現

1 冊の本に複数の著作が収められている場合のように, 書誌単位は 1 つであっても, 構成部分として複数の著作単位を含む資料がある。このような構成部分については, 著作単位毎に書誌データを作成するのではなく, 書誌単位に対応する書誌データの中に記録する。

構成部分である著作単位の記録 (内容著作注記) は, CW フィールドで行う。これによって, 著作のタイトル及び著者名による検索が可能となる。

ただし, 検索の必要のない内容注記 (索引, 参考文献等) は, NOTE フィールドに記録する。

4.3.4 所蔵データとの関係

個々の資料の所蔵状況を示すために, 出版物理単位の書誌データに対して, 所蔵データとの間にリンクを形成する。親書誌データには所蔵リンクを形成しない。ただし, 第 5 版適用以前に作成されたバランスしない書誌構造においては, 親書誌データに対して所蔵リンクを形成する。

書誌データには総合目録として共有すべき書誌情報を記録するのに対して, 所蔵データには, 各参加組織独自の分類等のローカルな情報を記録する。

4.4 著者の典拠形アクセス・ポイントの管理

著者 (創作者・寄与者等の個人・家族・団体) と書誌データの関連の記録のため AL フィールドを使用する。

目録作業時には, 記述対象資料の著者 (創作者・寄与者等の個人・家族・団体) の典拠形アクセス・ポイントに対応する著者名典拠データを作成し, 著者名リンクを形成することができる。

ただし、対応する著者名典拠データが既に作成されている場合は、リンク形成のみを行う。

リンク形成を行うと、AL フィールドには、リンク先著者名典拠データの ID (AID) が表示される他、さらにリンク先著者名典拠データの典拠形アクセス・ポイントが表示される。これによって、著者のアクセス・ポイントの形が統一されることになる。

リンク形成を行わない場合、本基準 8 の条項に従いつつ、AL フィールドに著者の典拠形アクセス・ポイントを記録する。

AL フィールドには、必要に応じて、関連指示子、会議の回次等も記録する。

また、基本記入の標目であることを示す主記入フラグ「*」を記録することもできる。

AL フィールドは、複数作成しうる。

4.5 著作の典拠形アクセス・ポイントの管理

著作と書誌データの関連の記録のために、UTL フィールドを使用する。

目録作業時には、記述対象資料の著作の典拠形アクセス・ポイントに対応する著作典拠データを作成し、著作リンクを形成することができる。

ただし、対応する著作典拠データが既に作成されている場合は、リンク形成のみを行う。

リンク形成を行うと、UTL フィールドには、リンク先著作典拠データのデータ ID が表示される他、さらにリンク先著作典拠データの典拠形アクセス・ポイントが表示される。これによって、著作のアクセス・ポイントの形が統一されることになる。

リンク形成を行わない場合、本基準 9 の条項に従いつつ、UTL フィールドに著作の典拠形アクセス・ポイントを記録する。

UTL フィールドには、必要に応じて、言語、訳、刊年等等を記録する。

また、基本記入の標目であることを示す主記入フラグ「*」を記録することもできる。

UTL フィールドは、複数作成しうる。

4.6 流用入力

4.6.1 MARC から参照データセットへの変換

図書書誌参照データセットには、外部機関作成書誌データの JAPAN/MARC (books) , TRCMARC, USMARC (books, maps, music, visual materials) , GPOMARC 等をフォーマット変換したものを収容する。

4.6.2 参照データセットからの流用入力

参照データセット中のデータは本基準によって作成されているものではないため、参照データセットからの流用入力に当たっては、本基準に合わせた修正が必要な場合がある。

なお、参照データセットからの流用入力によって作成されたデータと元の参照データとは、システム上の関連性はない。

4.7 システム登録

外部機関作成書誌データを総合目録データベースに登録する際に、サーバ側で自動的に行われる書誌登録のことを「システム登録」と呼び、システム登録によって作成された書誌データは PREBOOK データセットに登録される。PREBOOK データセットの書誌データは、所蔵登録をすることによって BOOK データセットに移行する。システム登録には目録担当者の作業は発生しない。ただし、PREBOOK データセットの書誌データに対して所蔵登録する場合は、現物をもとに慎重に判断し修正することができる。

なお、システム登録の対象となる外部機関作成書誌データは、JPMARC, TRCMARC, USMARC, USMARCX, UKMARC, GPOMARC のうち、ISBN が記入されている書誌データとする。(2020年8月3日現在)

4.7.1 システム追記

既存の書誌データに自動でフィールドを追加し、外部機関作成書誌データに含まれていた件名等の情報を記入することを「システム追記」と呼ぶ。システム追記を行う書誌データは、2020年8月3日以降に作成された BOOK データセットまたは PREBOOK データセットの書誌データとする。

システム追記の内容は以下のとおりである。

- OTHN, NBN, LCCN, GPON, SH, CLS の各項目を文字列完全一致で比較し、同じものがなければフィールドを追加する。
- CW の項目がまったくなければ追記する。なお、CW は下位書誌レベルの記述のみならず、目次情報の記録も許容するものとする。(2020年8月3日現在、CW のシステム追記を行うのは JPMARC, TRCMARC のみ)

4.7.2 事前処理

外部機関作成書誌データは、以下のような事前処理を経て PREBOOK データセットに登録される。この事前処理により、同じ ISBN を持つ書誌データが複数登録されることを防ぐとともに、既存データに不足している件名等の情報を追記する。

- 外部機関作成書誌データにおいて VOL グループが繰り返されていた場合、VOL グループ毎に以降の処理を行う。例えば、VOL: pbk.と VOL: hbk.の 2 つの VOL グループを持つ外部機関作成書誌データがあった場合、VOL: pbk.と VOL: hbk.の 2 つの書誌データとして扱う。
- 外部機関作成書誌データと同定される書誌データが BOOK データセットにある場合は、該当データにシステム追記を行う。
- 外部機関作成書誌データと同定される書誌データが BOOK データセットになく PREBOOK データセットにある場合は、該当データにシステム追記を行う。
- 外部機関作成データと同定される書誌データが BOOK データセットにも PREBOOK データセットにもない場合は、システム登録書誌データとして PREBOOK データセットに登録する。

4.7.3 自動リンク

PREBOOK データセットにあるシステム登録書誌データには、バーチャル国際典拠ファイル (Virtual International Authority File : VIAF) に登録された外部機関著者名典拠 ID との照合結果をもとに、NACSIS-CAT の著者名典拠データとの自動リンク形成処理が行われる。

自動リンク形成処理が行われるデータは、外部機関作成書誌データに著者名典拠 ID の情報が含まれ、外部機関作成著者名典拠データと NACSIS-CAT 著者名典拠データを VIAF 上で照合可能なデータに限る。

解説 (PREBOOK データセットの書誌データの利用)

PREBOOK データセットにおける書誌データには所蔵がないため、目録業務の際には検索対象となるが、NACSIS-ILL や CiNii Books 等においては検索対象とはしない。

4.8 共有データの修正

データ修正には、次のものがある。

1. 修正項目の発見館が、慎重に修正しうるもの

図書書誌データにおいて修正項目を発見した場合、修正項目の発見館が慎重に修正する。

なお、詳細な修正指針については、コーディングマニュアルで定める。

修正指針で、修正不可の場合については、別途新規書誌データを作成する。これによって作成された書誌データは、同一資料に対する書誌データと考えられる場合であっても、「並立書誌データ」として存在を許容する。

2. 修正依頼によって、国立情報学研究所が作業を行うもの

PREBOOK データセットにおいて、明らかに異なる著者名典拠データとリンクしている書誌データを発見した場合は、国立情報学研究所に報告する。発見館からの報告を受けて、内容を確認の上、国立情報学研究所でリンク解消等の対応を行う。

3. 共有データの削除

共有データの削除作業は、国立情報学研究所が行う。

共有データの削除が必要な場合は、各参加組織は、そのデータにかかわるリンク関係の確認、所蔵データの削除等を行った上で、削除予定データとして処理する。

解説（並立書誌データの活用と重複書誌）

第5版適用以前は、修正項目の発見館が慎重に修正しう内容以外は、当該データの作成館と相互に連絡協議を行う必要があった。第5版適用以降は、原則として、第5版適用以前に連絡協議を行っていたような場合は新規に書誌データを作成することとし、これによって、連絡協議による書誌調整は廃止する。

同一の資料に対する並立書誌データは、機械処理により相互に関連付けられ、RELATION データセットに登録される。NACSIS-ILL等の書誌利用においてRELATION データセットを活用することで、並立書誌データ同士をグループ化した形や関連付けた形で表示することができる。

また、並立書誌データとは異なり、書誌データの内容に全く異なる点が見られない書誌データは「重複書誌データ」として、国立情報学研究所が統合処理を行う。統合された結果は、国立情報学研究所からの書誌データ調整連絡の対象になる。

なお、和漢古書等、記述対象資料毎に作成する書誌データは、これまでと同様、統合しない。

5 図書所蔵データ

5.1 図書所蔵データセットの位置づけ

- 図書所蔵データセットは、図書書誌データセット（BOOK データセット）のデータに対応した各参加組織、配置コード毎の固有のデータを収録するデータセットである。
- 書誌データセット及び典拠データセットが共有データセットであるのとは異なり、所蔵データセットには、各参加組織固有のデータが格納される。

5.2 図書所蔵データ

5.2.1 図書所蔵データの作成

目録登録の際は、通常、1件以上の所蔵データを作成する。

5.2.2 図書所蔵データの作成単位

図書書誌データが書誌構造を有する場合、図書所蔵データは、原則として、単行書誌単位及び出版物理単位のデータに対応して作成する。

- 同一書誌データ、同一参加組織及び同一配置コードに対しては、二つ以上の所蔵データを登録することはできない。

5.3 図書所蔵データの構成と記述規則

第5版適用以前の図書所蔵データの構成と記述規則は、以下のようになっていた。

1件の書誌データに対応する資料が上、中、下等の出版物理単位に分かれ、各出版物理単位に対応する請求記号等を識別する必要がある場合は、出版物理単位に関するフィールドを繰り返して表現する。

出版物理単位に関するフィールドの繰り返しは、書誌データ作成時に、VOLフィールド（巻次等）を繰り返し作成することに対応して作成される。

また、第5版適用以前に作成されたバランスしない書誌構造においては、親書誌データに対して所蔵リンクを形成することがある。

第5版適用以降は、書誌データは原則として出版物理単位ごとに作成されるため、対応する所蔵データにおいてもVOLグループを繰り返し作成してはならない。ただし、4.3.2にあげた例外を除く。

同一配置コード内の複本の表現は、CLNフィールドに複本記号を伴った請求記号を記録する、RGTNフィールドにハイフンで結んだ登録番号を記録する、LDFフィールドに複本の部数を記録する等、各参加組織が、独自の方法を採用することができる。

6 雑誌書誌データ

6.1 雑誌書誌データの構成と記述規則

各項目中のデータ要素は、原則としてISBD（ISBDに対応しない項目についても類似の形式）に従って記述する。

6.1.1 ID & コードブロック

このブロックは、次の諸要素からなる。

- 目録規則上は記述の一部として記録されることになっているが、コードブロックにフィールドを独立させた項目

一般資料種別コード，特定資料種別コード，国際標準逐次刊行物番号，刊行頻度等

- その他のコード化情報

刊年，出版国コード，言語コード，その他の標準番号等

- 管理用フィールド
データ ID 等

コード類は，原則として，USMARC フォーマットのコード体系に準拠する。

6.1.2 記述ブロック

このブロックは，目録記入の記述の部分に相当する。

- 目録記入の伝統に則って用意された項目

タイトル及び責任表示に関する事項，版に関する事項，出版・頒布等に関する事項，巻次・年月次に関する事項等

- 検索を意識し，データの索引化を考慮した項目
その他のタイトル

各フィールドのデータは，ISBD 区切り記号法に準拠して記述するが，各データ要素の機械的識別のため，一部の記号法を改変して使用するところがある。

データの記述にあたって適用する目録用言語は，原則として日本語資料，中国語資料，韓国・朝鮮語資料については日本語，左記以外の資料については英語とする。

6.1.3 変遷ブロック

このブロックでは，変遷ファミリーID 及び変遷注記が表示される。

これらの項目では，国立情報学研究所が，タイトル変遷データセット中のデータとの間のリンク形成を行う。

6.1.4 リンクブロック

このブロックでは，目録作業時に，著者名典拠データとのリンク形成を行う。リンク形成後，AL フィールドにはリンク関係の情報が示される。

ただし，リンク形成を行わない場合，AL フィールドは，本基準 8 の項で定める典拠形アクセス・ポイントを記録するために使用する。

なお、雑誌書誌データにおいては、書誌構造の上下関係のリンクは行わない。

また、水平（変遷）関係に関しては、タイトル変遷データセットを構築し、書誌データ間のリンク形成を行う。（6.1.3 参照）

6.1.5 主題ブロック

このブロックでは、標準的な件名等を記録する。

6.2 記述対象のとりえ方

6.2.1 書誌単位

記述対象は、同一の本タイトルを継承している終期を予定しない一連の刊行物全体である。これに対応する書誌的記録を逐次刊行物書誌単位という。

この書誌単位は、本タイトルの変更等によって、他の書誌単位と水平（変遷）関係を持つことがある。

また、この書誌単位が他の書誌単位に属する場合のように、上下の階層関係を持つことがある。この場合、上位の書誌単位を集合書誌単位という。

6.2.2 書誌構造

雑誌書誌データにおいては、書誌単位の水平関係及び階層関係で書誌構造を形成する。

6.2.3 雑誌書誌データの作成単位

雑誌書誌データの作成単位は、以下の基準による。

1. 雑誌書誌データは、原則として、逐次刊行物書誌単位毎に作成する。集合書誌データのデータは、作成しない。

なお、合綴誌、複製・原本代替資料等においては、それに含まれる個々の逐次刊行物が一つの逐次刊行物書誌単位をなす。

2. 以下の場合には、それぞれ別の書誌データを作成する。

- (a) 本タイトル（従属タイトルを含む）が変遷したもの
- (b) タイトルが総称的で、かつ責任表示が変更したもの
- (c) 版が異なるもの
- (d) 資料種別が異なるもの
- (e) 複製・原本代替資料
- (f) 合綴誌、合刻複製版に含まれる個々の逐次刊行物
- (g) 独自の巻号次を持つ付録、補遺資料（別冊、増刊等）
- (h) 並行して異なる出版者から刊行されたもの

6.3 記述対象のデータ上での表現方法

6.3.1 書誌構造の表現

1. 書誌単位の水平関係は、変遷ブロックで表現する。
2. 階層関係は、逐次刊行物書誌単位のデータの TR フィールドに、本タイトルの共通タイトルと従属タイトルとして記録することを原則とする。

6.3.2 所蔵データとの関係

記述対象資料の所蔵状況の記録は、対応する書誌データ毎に行う。

書誌データには総合目録として共有すべき書誌情報を記録するのに対して、所蔵データには、所蔵年次データ、所蔵巻次データ、各参加組織独自のアクセス・ポイント、等のローカルな情報を記録する。

6.4 タイトル変遷情報の確証

タイトル変遷情報の確証は、各参加組織の報告に基づき、国立情報学研究所が行う。

確証の結果は、タイトル変遷データセットに反映され、タイトル変遷データセットとのリンク形成により、雑誌書誌データ中のタイトル変遷情報（FID, BHNT）が書き換えられる。

6.5 著者の典拠形アクセス・ポイントの管理

著者名典拠コントロールのために、AL フィールドを使用する。

目録作業時には、記述対象資料の著者のアクセス・ポイントに対応する著者名典拠データを作成し、著者名リンクを形成することができる。

ただし、対応する著者名典拠データが既に作成されている場合は、リンク形成のみを行う。

リンク形成を行うと、AL フィールドには、リンク先著者名典拠データの ID (AID) が表示される他、さらにリンク先著者名典拠データの典拠形アクセス・ポイントも表示される。これによって、著者のアクセス・ポイントの形が統一されることになる。

リンク形成を行わない場合、本基準 8 の条項に従いつつ、AL フィールドに著者の典拠形アクセス・ポイントを記録する。

AL フィールドには、必要に応じて、会議の回次等を記録する。

また、基本記入のアクセス・ポイントであることを示す主記入フラグ「*」を記録することができる。

AL フィールドは、複数存在する場合があります、また追加されうる。

6.6 流用入力

6.6.1 MARC から参照データセットへの変換

雑誌書誌参照データセットには、JAPAN/MARC (serials) , USMARC (serials) をフォーマット変換したものを収容する。

6.6.2 参照データセットからの流用入力

参照データセット中のデータは本基準によって作成されているものではないため、参照データセットからの流用入力に当たっては、本基準及び目録規則に合わせた修正が必要な場合がある。

なお、参照データセットからの流用入力によって作成されたデータと元の参照データとは、システム上の関連性はない。

7 雑誌所蔵データ

7.1 雑誌所蔵データセットの位置づけ

- 雑誌所蔵データセットは、雑誌書誌データセットのデータに対応した各参加組織、配置コード毎の固有のデータを収録するデータセットである。
- 書誌データセット及び典拠データセットが共有データセットであるのとは異なり、所蔵データセットには、各参加組織固有のデータが格納される。

7.2 雑誌所蔵データ

7.2.1 雑誌所蔵データの作成

目録登録の際は、通常、1件以上の所蔵データを作成する。

7.2.2 雑誌所蔵データの作成単位

同一書誌データ、同一参加組織及び同一配置コードに対しては、二つ以上の所蔵データを登録することはできない。

7.3 雑誌所蔵データの構成と記述規則

同一配置コード内の複本の表現は、CLN フィールドに複本記号を伴った請求記号を記録する、LDF フィールドに複本の部数を記録する等、各参加組織が、独自の方法を採用することができる。

8 著者名典拠データ

8.1 著者名典拠データセットの位置づけ

- 著者名典拠データセットは、書誌データの著者のアクセス・ポイントの形を統一し、一元的に管理するためのデータセットである。

このため、総合目録データベースの全ての書誌データセットに対して、共有かつ単一の著者名典拠データセットを維持する。

- 著者のアクセス・ポイントの形が統一されることによって、同一著者による著作の集中が図られる。
- 著者名典拠データセットには、統一された著者のアクセス・ポイントの形以外に、検索が予想される他の形や、関連する他の著者のアクセス・ポイントに関する情報を記録する。これによって、同一著者に対する多面的な検索を可能にする。

8.2 著者名典拠データ

8.2.1 著者名典拠データの作成

- 著者名典拠データは、書誌データの作成における著者（創作者・寄与者等の個人・家族・団体）の典拠形アクセス・ポイントの選定に対応して作成する。

日本語、中国語、韓国・朝鮮語およびラテン文字を用いる言語は表示形、それ以外の言語の優先名称は翻字形とする。翻字法は以下を参照する。

ALA-LC Romanization Tables

URL: <https://www.loc.gov/catdir/cpsr/roman.html>

参照データセットにデータがある場合、上記方針と異なるものもそのまま登録してよい。

著者名典拠データは、他の著者名典拠データにおける「からも見よ参照（SAF）」の設定によっても作成しうる。

8.2.2 著者名典拠データの作成単位

同一著者（個人、団体、会議、家族）に対しては、同一個人等に対して複数の形が許容されている場合を除き、1データを作成する。ただし、以下の基準を設ける。

- 改姓改名した個人は、それぞれの姓名をアクセス・ポイントとして著者名典拠データを作成する。
- 団体の下部組織は、それぞれをアクセス・ポイントとして著者名典拠データを作成する。
- 一連の回次を有する同一名称の会議は、会議名を単位として著者名典拠データを作成する。

8.3 典拠形アクセス・ポイント

典拠形アクセス・ポイント (HDNG) は、その著者名典拠データの記録対象を示す名称である。

典拠形アクセス・ポイントには、書誌データの著者のアクセス・ポイントの形及び表記の統一と、他のアクセス・ポイントとの区別に必要な事項が含まれる。

8.3.1 典拠形アクセス・ポイントの構成

典拠形アクセス・ポイントは、名称及び識別要素からなる。

また、日本名の場合は名称のヨミ、中国名の場合は名称のヨミ及び名称のその他のヨミが付加される。韓国・朝鮮名については、漢字表記を採用する場合、ハングルヨミが付加される。ハングル表記の場合、必要があれば、ハングルヨミが付加される。

8.3.2 典拠形アクセス・ポイントの形

- 典拠形アクセス・ポイントの決定に際しては、原則として、日本名、中国名、韓国・朝鮮名(和書系)およびそれ以外の外国名(洋書系)については、NCR2018 の統制形の記録(1.11)に関する条項およびそれに関する適用細則を適用する。典拠形アクセス・ポイントは、一意でなければならない。すなわち、他の名称と同一の形(判明している限り)となる場合は、何らかの識別要素を加え、別の形にする必要がある。
- 一連の回次を持つ同一名称の会議の場合、典拠形アクセス・ポイントには、回次、開催年、開催地は含めない。これらは、書誌データの AL フィールドの「その他の情報」に記録する。

解説 (優先言語の適用基準)

優先言語の適用は、以下の基準による。基準に基づいて選択した優先言語によって作成した著者名典拠データに対しては、データ修正時にも、適用する優先言語を変更しないことを原則とする。

・個人名

著者がその各著作の原版で用いている主な言語が日本語、中国語又は韓国・朝鮮語である場合は、表示されている形を適用する。その他の言語の場合は、ラテン文字の言語はそのまま表記し、その他の言語は翻字形を適用する。翻字には ALA-LC Romanization Table を参照する。主な言語が判明しない場合は、初出(総合目録データベースにおいて)の著作の言語によって決定する。

・団体名、会議名

著者が単一の公用語を用いている場合は、日本語、中国語又は韓国・朝鮮語である場合は、表示されている形を適用する。その他の言語の場合は、ラテン文字の言語はそのまま表記し、その他の言語は翻字形を適用する。翻字には ALA-LC Romanization Table を参照する。

公用語が単一であるか否か不明の場合は、主たる言語と判断できるものがあればその言語が単一の公用語であるとみなす。

公用語が不明の場合は、初出（総合目録データベースにおいて）の著作の言語によって決定する。

8.3.3 他の目録規則によるアクセス・ポイントの形

典拠形アクセス・ポイントを決定する際に適用しなかった目録規則に基づくアクセス・ポイントの形が必要な場合は、著者名典拠データの SF フィールド（から見よ参照）にそのアクセス・ポイントを記録する。

このとき、他の「から見よ参照」と区別するために、データの先頭に統一標目形フラグ「*」を記録していたが、NCR2018 適用以降は和洋の目録規則を統一したため記録しないこととする。

解説（典拠形アクセス・ポイントと和書系・洋書系アクセス・ポイントの関係）

目録システムにおける著者名典拠データは、和洋の区別をせず、1 著者 1 データを原則としている。

また、典拠形アクセス・ポイントについては、それぞれの言語の表記または翻字形で NCR2018 に基づいて作成する。

JPMARC 等では日本語の「アメリカ図書館協会」や「国際連合」というアクセス・ポイントの形を採用することが予想されるが、本基準では、これらの典拠形アクセス・ポイントは英語で「American Library Association」や「United Nations」とせざるをえない。

8.3.4 典拠形アクセス・ポイントのヨミの表記

- 和書系に基づく名称は、資料に顕著に表示されている文字の形で記録し、原則として、ヨミを付ける。

解説（中国語、韓国・朝鮮語の名称のヨミ）

1. 中国語表記のアクセス・ポイントについては、母国語読みがカタカナで表記されていなくとも、母国語読みがよく知られており、その発音を基にした日本語のカタカナ表記が読みとして参考資料等で確定している場合、当該カタカナ表記をヨミとする。
2. 韓国・朝鮮語名称の漢字で表記されたアクセス・ポイントについては、母国語読みがハングルで表記されていなくとも、ハングル表記が参考資料等で確定している場合は、ヨミをハングル表記する。ハングル表記の団体著者名をアクセス・ポイントとする場合、分かち書きしたハングルヨミを付ける。

3. 中国語で表記される名称については、当該ピンイン表記を「その他のヨミ」として記録することができる。

(例) 林, 志浩||リン, シコウ||lin, zhi hao (lin, zhi hao がその他のヨミ)

8.4 から見よ参照

から見よ参照 (SF) は、典拠形アクセス・ポイントとは別の形からの検索を可能にするための異形アクセス・ポイントである。

典拠形アクセス・ポイントの別の文字の形は、異形アクセス・ポイントとする。

例えば、洋書系の典拠形アクセス・ポイントに対するギリシャ文字形、キリル文字形、日本語カナ形、中国語漢字形等は、異形アクセス・ポイントである。

解説 (参照作成の留意点)

参照作成の際は、以下の点に留意する。

- 従属的に記入される団体の場合、レベルの異なるものへの参照は作成しない。
- アクセス・ポイントとなる団体名に階層がある場合、異なる形からの参照は、上位から順に各階層毎の単位で作成する。したがって、下部組織名を上位団体の異なる形に従属させた形からの参照は作成しない。

8.5 からも見よ参照

からも見よ参照 (SAF) は、目録規則において同一個人に対して複数の形が許容されている場合、又は団体名、会議名の変更によって複数の形が生じる場合に、それぞれの形を相互に関連づけるための項目である。

- からも見よ参照においては、相互参照先の著者名典拠データの典拠形アクセス・ポイントが示される。
-

解説 (参照作成の留意点)

参照作成の際は、以下の点に留意する。

- 団体が名称を変更した場合、一般には、一連の名称の変化に関し、前後の名称に対して参照を作成する。
- 団体が名称を変更した場合、それぞれの名称の下に従属的に記入される下部組織間では、その関連が明確であるならば参照を作成することができる。

8.6 流用入力

8.6.1 MARC から参照データセットへの変換

著者名典拠参照データセットには、日本名については、JAPAN/MARC (name authorities) を、外国名については、USMARC (name authorities) をフォーマット変換したものを収容する。

8.6.2 参照データセットからの流用入力

参照データセット中のデータは本基準によって作成されているものではないため、参照データセットからの流用入力に当たっては、本基準及び目録規則に合わせた修正が必要な場合がある。

なお、参照データセットからの流用入力によって作成されたデータと元の参照データとは、システム上は関連性はない。

8.7 共有データの修正

データ修正には、次のものがある。

1. 修正項目の発見館が、慎重に修正しうるもの
詳細な修正指針については、コーディングマニュアルで定める。

2. 共有データの削除

共有データの削除作業は、国立情報学研究所が行う。

共有データの削除が必要な場合は、各参加組織は、そのデータにかかわるリンク関係の確認、削除予定データとして処理する。

9 著作典拠データ

9.1 著作典拠データセットの位置づけ

1. 著作典拠データセットは、図書書誌データの著作のアクセス・ポイントの形を統一し、一元的に管理するためのデータセットである。

2. 著作のアクセス・ポイントの形が統一されることによって、同一著作の集中が図られる。

3. 著作典拠データセットには、統一された著作の典拠形アクセス・ポイントの形以外に、検索が予想される他の形や、関連する他の典拠形アクセス・ポイントに関する情報を記録する。これによって、同一著作に対する多面的な検索を可能にする。

9.2 著作典拠データ

9.2.1 著作典拠データの作成

著作典拠データは、図書書誌データの作成における典拠形アクセス・ポイントの選定に対応して作成する。

典拠形アクセス・ポイントの選定は、対応する目録規則の規定に従う。

典拠形アクセス・ポイントは、他の著作典拠データにおける「からも見よ参照（SAF）」の設定によっても作成しうる。

NACSIS-CAT で著作のデータを作成する対象は、当面は以下の資料とする。

- a) 日本、中国等の古典籍
- b) 聖典
- c) 無著者名古典
- d) 音楽作品
- e) その他識別する必要があると判断した著作

日本語・中国語等の古典作品は、著作典拠データを作成することができる。ここで言う

「日本語の古典作品」とは、「記録史料・文書等を除く、1868年以前に成立した日本語の著作全般」を指す。日本語の古典作品が収録された資料であれば、和古書に限らず、近現代刊行資料でも適用できる。

9.2.2 著作典拠データの作成単位

無著者名古典、聖典（及びその部篇）の同一著作に対しては、原則として、1データを作成する。

音楽作品（及び作品の部分）の同一作品に対しては、原則として、1データを作成する。ただし、多くの内容作品を持つものについては、

1. UTL フィールドの繰り返し可能回数等に物理的な制限があるため、個々の内容作品に対して UTL フィールドを作成できない場合もある
2. 上記の場合も、集合タイトルを適用することによって、ジャンル等による限定は可能である

点を考慮し、例外的に集合タイトルを認める。

日本語の古典作品の著作典拠データの作成単位は、国書データベースに該当する著作データがある場合は、その単位に揃える。該当する著作データがない場合は、原則に従い、著作を単位とする。

中国語図書の無著者名古典を含む古典、聖典（及びその部編）の同一著作に対しては、原則として、1データを作成する。

9.3 典拠形アクセス・ポイント

典拠形アクセス・ポイント（HDNG）は、その著作その著作を一意に識別する文字列である。

典拠形アクセス・ポイントには、図書書誌データの著作のアクセス・ポイントの形及び表記の統一と、他のアクセス・ポイントとの区別に必要な識別要素が含まれる。

9.3.1 典拠形アクセス・ポイントの構成

典拠形アクセス・ポイントは、著作の優先タイトルを基礎として構築する。その形には、優先タイトルと創作者（個人・家族・団体）に対する典拠形アクセス・ポイントを結合した形と、優先タイトル単独の形とがある。前者を結合形、後者を単独形とよぶ。いずれについても、必要に応じて識別要素を付加する。

また、日本語のものにはタイトルのヨミを、中国語名称には名称のヨミ及び名称のその他のヨミが付加される。韓国・朝鮮語名称については、ハングルヨミを付加する。創作者の優先名称が日本語等の場合には、そのヨミも付加する。

9.3.2 典拠形アクセス・ポイントの形

- 典拠形アクセス・ポイントは、一意でなければならない。すなわち、他のものと同一の形（判明している限り）となる場合は、何らかの識別要素を加え、別の形にする必要がある。
- 典拠形アクセス・ポイントの決定に際しては、その著作の体现形または参考資料によって最もよく知られている言語を選択する。容易に判明しない場合は、原版タイトルの言語を選択する。
- 著作の言語が日本語、中国語又は韓国・朝鮮語である場合は、目録用言語として日本語を適用する。その他の言語の場合は、英語を適用する。
- 作曲者を有する音楽作品は、その著者名アクセス・ポイントのもとに著作のタイトルを記録する。
- 著者を有する中国語資料の古典作品は、その著者アクセス・ポイントのもとに著作タイトルを記録する。
- 典拠形アクセス・ポイントには、言語、訳及び刊年等は含めない。これらは、書誌データの UTL フィールドの「その他の情報」に記録する。

9.3.3 異形アクセス・ポイント

典拠形アクセス・ポイントとして選択しなかった異なる形は、異形アクセス・ポイントとして、著作典拠データの SF フィールド（から見よ参照）に記録することができる。

9.3.4 典拠形アクセス・ポイントの表記

- 和書系の名称は、資料に顕著に表示されている文字の形で記録し、原則として、ヨミを付ける。
- 洋書系の名称は、ラテン文字で表記する。
- 中国語で表記される名称については、当該ピンイン表記を「その他のヨミ」として記録することができる。

(例) 山海経||センガイキョウ||shan hai jing (「shan hai jing」がその他のヨミ)

9.4 から見よ参照

から見よ参照 (SF) は、典拠形アクセス・ポイントとは別の形からの検索を可能にするための異形アクセス・ポイントである。

典拠形アクセス・ポイントの別の文字の形は、異形アクセス・ポイントとする。

例えば、洋書系の典拠形アクセス・ポイントに対するギリシャ文字形、キリル文字形、日本語カナ形、中国語漢字形等は、異形アクセス・ポイントである。

9.5 からも見よ参照

からも見よ参照 (SAF) の作成範囲及びその形は、目録規則に基づく。

- からも見よ参照においては、相互参照先の著作典拠データの典拠形アクセス・ポイントが示される。

9.6 流用入力

9.6.1 MARC から参照データセットへの変換

著作典拠参照データセットには、USMARC (name authorities) をフォーマット変換したものを収容する。

9.6.2 参照データセットからの流用入力

参照データセット中のデータは本基準によって作成されているものではないため、参照データセットからの流用入力に当たっては、本基準及び目録規則に合わせた修正が必要な場合がある。

例えば、参照データセットからの流用によって得られる著作の典拠形アクセス・ポイントのうち、著作典拠データの作成範囲の基準に合致しないものについては、著作典拠データの作成はせず、書誌データの VT フィールド (その他のタイトル) への記録にとどめる。

なお、参照データセットからの流用入力によって作成されたデータと元の参照データとは、システム上の関連性はない。

9.7 共有データの修正

データ修正には、次のものがある。

1. 修正項目の発見館が、慎重に修正しうるもの

詳細な修正指針については、コーディングマニュアルで定める。

2. 共有データの削除

共有データの削除作業は、国立情報学研究所が行う。

共有データの削除が必要な場合は、各参加組織は、そのデータにかかわるリンク関係の確認、削除予定データとして処理する。

10 入力データ記述文法

各データ要素を的確にデータベースに収録するため、入力データ記述文法が存在する。この記述文法は、原則として、ISBDの区切り記号法に準拠している。（コーディングマニュアル参照）

11 データの表記法

11.1 記述の原則

目録システムにおいてデータを入力する際に使用する文字・記号の範囲及び使用法は、以下に定めるとおりとする。

11.1.1 目録システム用文字セット

目録システムで扱うことができる文字・記号は、次のとおりである。

「JIS X 0221」（以下「X0221」）に依拠した文字・記号

ただし、日本の規格の代表字体があるものは、「JIS X 0208」（以下「X0208」）の包摂規準を適用する。したがって、原規格分離により、「X0208」で包摂されていたものが「X0221」で分離した文字についても、「X0208」の包摂を優先する。（「NACSIS-CATにおける正規化処理について」参照）

以上を、「目録システム用文字セット」と呼ぶ。

データを入力する際は、原則として、目録システム用文字セット中の全ての文字種を使用することができる。

11.1.2 転記の原則

・原則

記述対象資料に表示されている事項を転記するときは、原則として、資料に表示されているままの字体等を使用する。

・書体の違い

楷書体と草書体，明朝体とゴシック体，ラテン文字の筆記体とイタリック体，ドイツ語の亀の甲文字等の書体の違いは無視し，「同じ」文字として扱う。

・字形のわずかな違い

同一字体，同一音訓，同一意義の漢字の字形のわずかな違いは無視し，目録システム用文字セットの字形を使用する。「JIS X 0208 6.6.3 漢字の字体の包摂規準」に示される例は同一のものとして扱う。

11.1.3 特殊文字・記号

「JIS X 0201」及び「X0208」に含まれていない特殊文字，記号，図形情報等については，11.1.2 転記の原則の例外とし，以下に示す方法にしたがって記録する。

(1) 特殊文字，記号，図形情報等がタイトル等の必要不可欠な要素を構成していないと判断した場合は，転記せずに省略する。その存在を明記する必要があると判断した場合は，省略したことを注記する。

(例)

あのね (情報源上では「あのね」となっている)

The Gumby book of letters (情報源上では GumbyR となっている)

(2) 特殊文字，記号，図形情報等がタイトル等の必要不可欠な要素を構成していると判断した場合

①当該特殊文字，記号，図形情報等を他の文字に置き換えても，本来の意味が失われない場合は，他の文字に置き換える。

(例)

? 1/4

Ⅲ [ローマ数字] III [アルファベットの I]

(株) (株) [丸括弧と株]

1月 1月

? キログラム

cm cm [c と m]

? C

XIXe siecle XIXe siecle

知の世界へどうぞ 知の世界へどうぞ

②当該特殊文字，記号，図形情報等を他の文字・記号に置き換えると，本来の意味が失われる場合は，以下に掲げるいずれかの方法を採用して，記録する。

(a) 文字セットに存在する，対応する文字に置き換え，角がっこに入れる。注記において説明を加える。

(例)

X[2]+Y[2]

NOTE:[2]は上つき文字

1f7[/]2 nuclei

NOTE:On t.p. "[/]" is subscript

(b) 2つ以上の要素に分離し、一列で表記し、角がっこに入れる。注記において説明を加える。

(例)

[○秘]レポート

NOTE:[○秘]は合成文字

[√ap.]

NOTE:ap.は√内に表記されている

(c) 記述対象資料で使用されている言語における、当該記号の一般的な名称等に置き換え、角がっこに入れる。その言語での名称が明らかでない場合には、和資料については日本語、洋資料については英語を使用する。情報源にヨミがふられている場合には、そのヨミに従う。注記において説明を加える。

(例)

虹の花嫁は[ハート]のエース

NOTE:[ハート]はハートマークによる表示

Poe[try] and free verse

NOTE:On t.p. "[try]" appears as an illustration in the form of a tree

(情報源上では Poe となっている)

11.2 外字の扱い

目録システム用文字セット外の文字・記号等を、「外字」と呼ぶ。外字は、次のように扱う。

11.2.1 漢字の外字

漢字の外字が出現したときは、次の辞書を「基本辞書」として、以下の手順で処理を行う。なお、異体字の判定の際は、「X0208」の包摂規準を敷衍して行う。

大漢和辞典 / 諸橋轍次。—— 大修館書店

広漢和辞典 / 諸橋轍次[ほか]。—— 大修館書店

0 外字 X が出現した

1 基本辞書を検索する

1.1 X が基本辞書にある

1.1.1 X の異体字 Y が目録システム用文字セットにある

1.1.1.1 X は Y の誤字、略字、俗字、譌字等である → Y を使用する

- 1.1.1.2 XはYの誤字、略字、俗字、譌字等でない → Xを外字登録する
 - 1.1.2 Xの異体字Yが目録システム用文字セットにない → Xを外字登録する
 - 1.2 Xが基本辞書にない
 - 1.2.1 基本辞書にあるYがXの異体字であると考えられる
 - 1.2.1.1 Yが目録システム用文字セットにある → Yを使用する
 - 1.2.1.2 Yが目録システム用文字セットにない
 - 1.2.1.2.1 Yは基本辞書にあるZの誤字、略字、俗字、譌字等である
 - 1.2.1.2.1.1 Zが目録システム用文字セットにある → Zを使用する
 - 1.2.1.2.1.2 Zが目録システム用文字セットにない → Zを外字登録する
 - 1.2.1.2.2 Yは誤字、略字、俗字、譌字等でない → Yを外字登録する
 - 1.2.2 Xの異体字等が基本辞書にない → Xを外字登録する
- なお、誤字、略字、俗字、譌字等の判断は、基本辞書による。

11.2.2 漢字以外の外字

UCSにない文字は、原則として、LCの採用する方式に準じて、当該言語に応じた翻字形を「◆」で囲んで入力する。（Cataloging Service Bulletinの各号を参照）

11.2.3 翻字形以外の外字の登録方法

1. 基本辞書にある外字

「◆X99…99◆」と入力する。

ただし、「◆」（黒菱形）は、UCSの「25C6」である。また、「X」は基本辞書の種類を表すコードであり、実際には、次の文字を使用する。

大漢和辞典 → D

広漢和辞典 → K

「99…99」は、各辞典における検字番号である。

なお、大漢和辞典における「'」，又は「"」のついた検字番号は、数字のあとに、それぞれ「'」（アポストロフィ），又は「"」（引用符）を付けて表す。

2. 基本辞書にない外字

「◆◆」と入力し、該当文字が表示された標題紙、奥付等のコピーを国立情報学研究所に送付する。このとき、対応するデータのID、出現フィールド等の情報を付記する。

3. 連続する外字

外字が2文字以上連続する場合、1字ずつ「◆◆」で括って入力する。

11.3 ヨミの表記及び分かち書き規則

11.3.1 目的

この規則は、分かち書きされたヨミから検索用インデックスを作成し、オンライン検索を

可能にすることを目的とする。

したがって、対象となるフィールド全体について記述自体から検索用インデックスを作成することが可能な場合には、ヨミはなくてもよい。

(例) 「PC-9801 E/F/M Interface」というタイトルにおいては、「PC」「9801」「E」「F」「M」及び「INTERFACE」という検索用インデックスが作成されるので、ヨミはなくても検索は可能である。

(例) 「PC-9801 マシン語入門」というタイトルからは、「マシン語」「入門」等の漢字わかちされた検索用インデックス及び「マシンゴ」「ニューモン」等のインデックスは、「PC-9801 マシンゴ ニューモン」と分かち書きしたヨミを入力することによって作成されるので、このような場合はヨミを表記する必要がある。

洋書系の資料における並列タイトル、その他のタイトル等でも、ヨミを表記することによって、日本語読みによるオンライン検索が可能となる。

(例) 「Tanka, haiku, renga = 短歌, 俳句, 連歌//Tanka, haiku, renga = タンカ, ハイク, レンガ」とヨミを表記することによって、「タンカ」「ハイク」「レンガ」からの検索が可能となる。

(「短歌, 俳句, 連歌」が並列タイトル, 「タンカ, ハイク, レンガ」が並列タイトルのヨミ)

中国語資料については、ピンイン表記を「その他のヨミ」として記録することができる。

(例) 中国文学?展史||チュウゴク ブンガク ハッテンシ||zhong guo wen xue fa zhan shi
(「zhong guo wen xue fa zhan shi」がその他のヨミ)

また、各参加組織においては、分かち書きされたヨミによって記入の語順排列を行ったり、分かち書きを無視して記入の字順排列を行うことが可能となる。

ヨミ及びその他のヨミを表記することが可能なフィールドは、次のとおりである。

1. 書誌データ

タイトル及び責任表示に関する事項 (TR)

その他のタイトル (VT)

内容著作注記 (CW)

書誌構造リンク (PTBL)

著者名リンク (AL)

著作リンク (UTL)

件名 (SH)

2. 典拠データ

典拠形アクセス・ポイント (HDNG)

から見よ参照 (SF)

からも見よ参照 (SAF)

11.3.2 ヨミの表記

1. ヨミには、目録システム用文字セット中の、漢字を除く全ての文字種を使用することができる。

2. 漢字、ひらがな、カタカナ及び踊り字（々、ゝ、ゞ等の繰り返し符号）によって表示された日本語及び中国語には、原則として、カタカナでヨミをふる。

(a) カタカナのヨミは、NCR2018の付録「A.1 片仮名記録法」に準じ、語の発音に従って表記する。ただし、「A.1 片仮名記録法」のA1.2～A1.4は適用しない。

ただし、振りがなのある語は、振りがなをヨミとする。また、ひらがな、又はカタカナで表示された外来語・外国語・擬似外国語は、表示されているとおりを、ひらがなはカタカナに換えて、ヨミとする。

(例)

てふてふ チョウチョウ

字を書く ジ オ カク

磯づり イソズリ

佐々木 ササキ

ほゞ ホボ

山人の賦 ヤモウド ノ ウタ

シェクスピア物語 シェクスピア モノガタリ

シェークスピア全集 シェークスピア ゼンシュウ

バレエ バレエ

バレー バレー

テクノロジー テクノロジー

ウインチ ウインチ

アンシャンレジーム アンシャン レジーム

ないたあ ナイタア

(b) 発音を二つ以上持つ語は、権威ある国語辞書、人名辞典等によって、ヨミの統一を図るものとする。ただし、TRフィールドに採用しなかったヨミも広く一般に使用されていると考えられるものについては、いずれのヨミからもアクセスできるよう、異なるヨミをVTフィールドに記録することが望ましい。

(例)

日本 ニホン

日本永代蔵 ニッポン エイタイグラ

研究所 ケンキュウジョ
私 ワタクシ
数学科 スウガクカ
医学界 イガクカイ
英文学科 エイブン ガツカ
施行 シコウ
便覧 ベンラン
読本 トクホン
京洛 キョウラク

(c) 漢数字は、日本語として不自然でない場合、原則として、次のように読む。

(例)

一 イチ 六 ロク 百 ヒャク
二 ニ七 シチ 千 セン
三 サン 八 ハチ 万 マン
四 シ九 ク億 オク
五 ゴ十 ジュウ 兆 チョウ

ただし、次のような例外がある。

一、八、十に、カ行、サ行、タ行、又はパ行の音が続くとき及び、六、百にカ行、又はパ行の音が続くときは、促音化する。

(例)

八方美人 ハツポウビジン
三十六計 サンジュウロッケイ

人、つ、日、等の助数詞がついたときは、慣用に従って、和語読みをする。

(例)

二人 フタリ
七つ ナナツ
二十四時間 ニジュウヨジカン
二百十日 ニヒャクトオカ

普通名詞、固有名詞中に含まれるときは、その語の発音に従う。

(例)

八百屋 ヤオヤ
九州 キュウシュウ

回次、年次、日付、順序付を表す漢数字は、対応するアラビア数字をヨミとする。

(例)

第二百十回 ダイ 210 カイ
昭和六十年代 ショウワ 60 ネンド
第二編 ダイ 2 ヘン

(d) 漢字で表された外国の地名、人名及び団体名等は、次のように読む。
原語に近い慣用音による。

(例)

倫敦 ロンドン
伯林 ベルリン
那波烈翁 ナポレオン
上海 シャンハイ
桑港 サンフランシスコ
香港 ホンコン
米 メートル
糎 センチメートル

日本名として扱うときは、音読みとする。

(例)

則天武后 ソクテン ブコウ
郭沫若 カク マツジャク
毛沢東 モウ タクトウ
金日成 キン ニッセイ

(e) ひらがな又はカタカナで表された外国の地名、人名及び団体名等は、表示されているとおりを、ひらがなはカタカナに換えて、ヨミとする。

(例)

あめりか アメリカ
ソビエト連邦 ソビエト レンポウ
シェークスピア シェークスピア
W. M. ヴント W. M. ヴント

3. ラテン文字、アラビア数字、ギリシャ文字、ロシア文字及び記号等、上記2に規定した文字以外の文字・記号については、原則として、表示されているとおりをヨミとする。

(読むときの発音には従わない)

ただし、回次、年次、日付及び順序付を表すローマ数字は、対応するアラビア数字をヨミとする。

発音に従うヨミを必要とするときは、書誌データにおいてはVTフィールド（その他のタ

イトル)に、典拠データにおいてはSFフィールド(から見よ参照)に記録する。
その場合の表記法は、「A.1片仮名記録法」のA1.2~A1.4に従う。

(例)

R&D レポート R&D レポート

Logo Logo

T. S. エリオット T. S. エリオット

(cf. 読むとき:ティーエスエリオット)

PC-9801 PC-9801

(cf. 読むとき:ピーシー クハチマルイチ)

超 LSI チョウ LSI

Fortran Fortran

(cf. 読むとき:フォートラン)

dBASEII dBASEII

PL/I PL/I

(cf. 読むとき:ピーエル ワン)

第 XV 回 ダイ 15 カイ

200 の用語 200 ノ ヨウゴ

E+F E+F

入門 CP・M ニュウモン CP・M

NHK ブックス NHK ブックス

(cf. 読むとき:エヌエイチケイ ブックス)

第 5 世代 ダイ 5 セダイ

2001 年 2001 ネン

100% 100%

User's guide User's guide

19 世紀 19 セイキ

13C NMR 13C NMR

セオリーZ セオリー Z

3次元グラフィックス3ジゲン グラフィックス

0 歳 0 サイ

X線結晶解析 Xセン ケツショウ カイセキ

1万分の1 1マンブン ノ 1

100億光年 100オク コウネン

11.3.3 分かち書き

1. 日本図書館研究会『目録編成規則』第2章「ワカチガキ」に準じ、原則として、単語をもって分かち書きの単位とする(この資料は同研究会により、2015年4月発行の「図書館資料の目録と分類増訂第5版」に再録)。成語、あるいは文節をもって分かち書きの単位

とはしない。

(例)

農業経済 ノウギョウ ケイザイ

(成語の「ノウギョウケイザイ」1単位とはしない)

愛児の病気と育て方 アイジ ノ ビョウキ ト ソダテカタ

(文節をもって「アイジノ ビョウキト ソダテカタ」の3単位とはしない)

2. 名詞・連体詞・副詞・接続詞・感動詞は、原則として、1単語を1単位とする。

(例)

助詞：体言のあとにくる助詞は、原則として分離する。

にんじんの作り方 ニンジン ノ ツクリカタ

太陽系と宇宙 タイヨウケイ ト ウチュウ

接頭語：接頭語は、原則として分離せず、その冠せられている語とあわせて全体を一語とする。

新加工技術読本 シンカコウ ギジユツ トクホン

花の病害虫と新防除 ハナ ノ ビョウガイチュウ ト シンボウジョ

超技術社会への展開 チョウギジユツ シャカイ エノ テンカイ

超超高压送電 チョウチョウコウアツ ソウデン

小電流サイリスタ ショウデンリュウ サイリスタ

果樹園芸大辞典 カジュ エンゲイ ダイジテン

大地震図譜 ダイジシン ズフ

半自動アーク溶接作業 ハンジドウ アーク ヨウセツ サギョウ

非鉄金属 ヒテツ キンゾク

不規則信号 フキソク シンゴウ

分離する接頭語：接頭語であっても、書名の冒頭にあつて、接頭語を除く残りの部分全体にかかるものは分離する。

新数学双書 シン スウガク ソウショ

接尾語：接尾語は原則として分離せず、その前にある語とあわせて全体を一語とする。

ロシア語辞典 ロシアゴ ジテン

世界探検史 セカイ タンケンシ

電気-油圧式シーケンス制御 デンキ-ユアツシキ シーケンス セイギョ

総合調査報告書 ソウゴウ チョウサ ホウコクショ

導電性ポリマー ドウデンセイ ポリマー

脂肪族イオン反応 シボウゾク イオン ハンノウ

統計的推測 トウケイテキ スイソク

土木構造物防災 ドボク コウゾウブツ ボウサイ
原子団別有機化学反応 ゲンシダンベツ ユウキ カガク ハンノウ
物理化学実験法 ブツリ カガク ジッケンホウ
集積回路網 シュウセキ カイロモウ
制御用電子計算機 セイギョヨウ デンシ ケイサンキ
応用物性論 オウヨウ ブッセイロン
数学的理論 スウガクテキ リロン

分離する接尾語：接尾語であっても、書名の末尾にあって、接尾語を除く部分全体を受け
るものは分離する。

栄養価順位表 エイヨウカ ジュンイ ヒョウ
日本産蜻蛉分布表 ニホンサン トンボ ブンプ ヒョウ
大工さしがね術 ダイク サシガネ ジュツ
屋内配線図 オクナイ ハイセン ズ

分離する接尾語：接尾語であっても、「たち」が名詞を受けるものは分離する。

子供たち コドモ タチ

複合語：訓読するものは、原則として一語とする。

酒づくり談義 サケズクリ ダンギ
錦鯉 ニシキゴイ

複合語：漢字3字から成り、音読するもので、一部音読、一部訓読するものは、原則とし
て一語とする。ただし、例のように一語として熟していないものは分離する。

水処理 ミズ ショリ

複合語：漢字3字から成り、音読するもので、第1字が、それだけで一個の名詞的概念を
表し、独立性をもつときは、それを分離する。

熱力学 ネット リキガク
熱機関 ネット キカン
熱処理 ネット ショリ
膜構造 マク コウゾウ

複合語：漢字3字から成り、音読するもので、第一字が修飾的機能をはたすもので、独立
性にとぼしいときは、接頭語として扱う。

光化学 コウカガク
生化学 セイカガク
理化学 リカガク

複合語：漢字3字から成り、音読するもので、はじめ2字が独立の概念を表し、第3字が従属的な場合は、第3字を接尾語として扱う。

昆虫記 コンチュウキ

燃料油 ネンリョウユ

観音竹 カンノンチク

複合語：漢字3字から成り、音読するもので、上記のもの以外は全体を一語とする。

剛構造 ゴウコウゾウ

複合語：漢字4字又はそれ以上から成り、音読されるもので、漢字2字から成る単語2個（又はそれ以上）から合成されるものは、単語ごとに分離する。いずれかが3字から成る場合も、同様に扱う。

電子計算機 デンシ ケイサンキ

現代経営心理学講座 ゲンダイ ケイエイ シンリガク コウザ

工業有機化学 コウギョウ ユウキ カガク

応用微分積分学 オウヨウ ビブン セキブンガク

数理統計学 スウリ トウケイガク

腐食科学入門 フショク カガク ニュウモン

物性工学 ブッセイ コウガク

最新機械工学 サイシン キカイ コウガク

材料力学 ザイリョウ リキガク

近代数学講座 キンダイ スウガク コウザ

上野動物園水族館ガイド ウエノ ドウブツエン スイゾクカン ガイド

情報化時代 ジョウホウカ ジダイ

独占禁止法 ドクセン キンシ ホウ

※この場合の「法」は接尾語ではないので分離する

図学概説 ズガク ガイセツ

燃料・燃焼器具概論 ネンリョウ・ネンショウ キグ ガイロン

機械振動学通論 キカイ シンドウガク ツウロン

現代気候学論説 ゲンダイ キコウガク ロンセツ

複合語：漢字4字又はそれ以上から成り、音読されるもので、漢字1字と3字の2単語から合成されるものについては、漢字3字から成る複合語の扱いに準ずる。

電磁気学 デンジキガク

数詞：数詞は、すべて一語とするが、助数詞をともなうものは、それを含めて一語とし、「第」は接頭語として扱う。

第1次第2次大戦間爆撃機 ダイ1ジ ダイ2ジ タイセンカン バクゲキキ

人称代名詞：人称代名詞は、すべて一語とするが、「がた」「たち」など、複数を表す語は接尾語として扱う。

君たち キミタチ

3. 人名・地名・団体名

人名は、姓と名をそれぞれ1単位とする。

(a) 屋号、官号、ペンネームの第1語は、姓に準ずる。雅号、僧名、ペンネームの第2語は、名に準ずる。

(例) 三笠宮崇仁 ミカサノミヤ タカヒト

(b) 姓と名の間の助詞の「の」は、姓に含める。

ただし、続柄を表す「の」は、1単位とする。

(例)

紀貫之 キノ ツラユキ

道綱母 ミチツナ ノ ハハ

(c) 官職名を伴う人名は、全体を1単位とする。

(例) 紫式部 ムラサキシキブ

(d) 「天皇」「皇后」「皇太后」「皇太子」「陛下」「殿下」「親王」「内親王」「太子」等は、独立の1単位とする。

ただし、「院」は独立の単位とはしない。

(例)

天皇陛下 テンノウ ヘイカ

永福門院 エイフクモンイン

(e) 尼僧名につけられた「尼」、姓につけられた「氏」「家」は、独立の1単位とはしない。

(例)

阿仏尼 アブツニ

平家 ヘイケ

藤原氏 フジワラシ

地名

(a) 国名は、原則として、1単位とする。

ただし、「合衆国」「連邦」「王国」「共和国」は、独立の1単位とする。

(例)

アメリカ合衆国 アメリカ ガッシュウコク

ソビエト連邦 ソビエト レンポウ

(b) 「都」「道」「府」「県」「市」「町」「村」「区」「郡」「州」「省」は、分離しない。「～地方」は分離する。

(例)

埼玉県 サイタマケン

四川省 シセンショウ

カリフォルニア州 カリフォルニアシュウ

東北地方 トウホク チホウ

(c) 地形に基づく地名、経済的・文化的地域名、地名を含む複合名詞は、複合名詞に準ずる。

(例)

富士山 フジサン

黒部溪谷 クロベ ケイコク

筑豊炭田 チクホウ タンデン

団体名は、複合名詞及び動詞・形容詞・形容動詞・助動詞・助詞の分かち書きに準ずる。

(a) 「国立」はそれだけで一語とする。

(例) 国立国語研究所 コクリツ コクゴ ケンキュウジョ

(b) 地方公共団体名につづけて「立」とある場合は、以下のように分離する。

ただし、「北海道立」の場合は分離しない。

(例)

岡山県立大学 オカヤマ ケンリツ ダイガク

北海道立図書館 ホッカイドウリツ トショカン

4. 略語、略称は、1単位とする。

(例)

ソ連共産党大会 ソレン キョウサントウ タイカイ

国鉄労組 コクテツ ロウソ

国連安保理事会 コクレン アンポ リジカイ

5. 外来語・外国語・擬似外国語は、原語の単語の分け方に従って分かち書きをする。

(例)

ガイドブック ガイド ブック

カラーテレビ カラー テレビ

タイムシェアリング タイム シェアリング

ビニルハウス ビニル ハウス

ライフサイエンス ライフ サイエンス
スポーツカー スポーツ カー

6. 動詞・形容詞・形容動詞に、形容詞、助動詞又は助詞が続く場合は、それらを含めて1単位とする。

(例)

わかりやすい ワカリヤスイ
食べられる野草 タベラレル ヤソウ
休むに似たるか ヤスムニ ニタルカ
上手な使い方 ジョウズナ ツカイカタ

7. 助詞が二つ以上続く場合は、その全体を1単位とする。

(例)

星座への招待 セイザ エノ ショウタイ
アインシュタインとの論争 アインシュタイン トノ ロンソウ
化学結合とは何か カガク ケツゴウ トワ ナニ カ
だれにもわかる ダレ ニモ ワカル
生物としての人間 セイブツ トシテノ ニンゲン

11.3.4 中国語資料のヨミの表記及び分かち書き規則

11.3.4.1 目的

この規則は、中国語書誌に付与される日本語ヨミのゆれを少なくするための目安であり、日本語資料と同様に、分かち書きされたヨミから単語単位の検索性漢字インデックスを作成し、オンライン検索を可能にすることを目的とする。これは、中国文化を反映した語を含む日本語資料にも適用する。

11.3.4.2 ヨミの表記

1. 原則として、日本語慣用の音読みをカタカナで表記する。

熟語の読みの典拠は、「大漢和辞典語彙索引」(大修館)(以下「語彙索引」と略称する)の中で音読みされている語とする。

「語彙索引」にない語は、下記の(注)の方式に従い、漢字1字ごとの一般的な音読みを与える。

(1) 日本語で音読みされる語は日本語の慣用音どおりとし、無理に漢音を使用しない。

(例)

?? ケイザイ
?歌 シイカ
黄金 オウゴン
古今 ココン

一?夫? イツツイ フウフ

(2) 日本語で訓読みや一部訓読みが一般的なもの、及び日本語にない語は、漢字1字ずつの一般的な音読みを与える。

(例)

广? コウジョウ

大型 ダイケイ

?物 ドクブツ

内幕 ナイマク

野?薇 ヤショウビ

家 カ

*巴金の「家」

初恋 ショレン

*屠格涅夫(ツルゲーネフ)の「初恋」

??祥子 ラクダ ショウシ

*原音読みの「ルオトゥ シヤンズ」としない

??企? キョウチン キギョウ

*「?(郷)」の一般読みは「キョウ」

(3) 典拠に漢音読みと呉音読みがある語は、漢音読みを採用する。

(例)

?名 イメイ

?情 フウジョウ

?典 ケイテン

光明日? コウメイ ニッポウ

工夫 コウフ

人? ジンカン

(4) 簡体字は、相当する繁体字の読みを与える。

(例)

征(徴)集 チョウシュウ

*「セイシュウ」としない。

?叶(葉) コウヨウ

*「コウキョウ」としない。

听然 キンゼン

*元々の繁体字としての読み

听(聽)? チョウセツ

*「キンセツ」としない。

*?の繁体字形は区別し難いので、「兌換」の意味のあるときは「カイ」（匯）と読み、それ以外は「イ」（彙）と読む。例外として、「文匯報」は「ブンワイホウ」と読む。

(5) 簡体字形か繁体字形かで典拠の読みが異なるものは、繁体字形の読みを採用する。

(例)

萃(蘋)果 ヒンカ

*「ヘイカ」としない。

(6) 中国語の現代音が日本語化したと認められるものは、日本語の慣用音による。

(例)

?音 ピンイン

?子 ギョウザ

麻婆豆腐 マーボドウフ

四角号? シカクゴウマ

*「?」の一般音は「バ」。

2. 同じ語でも、由来や意味に応じて読み分けることがある。

(1) 古典に由来する語は典拠の読みを採用し、一般的な読みと使い分ける。

(例)

文?注引?引得 モンゼンチュウインショ イントク

唐代文? トウダイブンセン

山海?探原 センガイキョウタンゲン

山海漫? サンカイマندان

(2) 一般的に、朝代を表わす「明」「清」は「ミン」「シン」と読み、台湾を表わす「台」は「タイ」と読む。ただし、語彙例がある場合は、その読みに従う。

(例)

明清史 ミンシンシ

皇清?解 コウセイケイカイ

*典拠の語彙例

台声?志社 タイセイザッシンヤ

*対台湾への宣伝を目的とする出版社

3. 中国固有名

(1) 中国人名は典拠のとおりとし、典拠にない場合は一般的な読みを与える。

ただし、典拠における促音は採用せず、典拠にない連濁は採用しない。

(例)

?穀 ガクキ

* 典拠どおりに「ガツキ」としない。

曹雪芹 ソウ セツキン

* 典拠どおりに「ソウ セツキン」としない。

? 雪峰 フウ セツホウ

* 「フウ セツポウ」としない。

周立波 シュウ リツハ

* 「シュウ リツパ」としない。

韓非 カン ピ

(2) 姓としての「叶」「?」「向」は、典拠の読みは採用せず、それぞれ「ヨウ」「リュウ」「コウ」と読む。

(例)

叶徳? ヨウ トクキ

* ショウ トクキとしない

? 从云 リュウ ジュウウン

* リョウ ジュウウンとしない

向土璧 コウ シヘキ

* ショウ シヘキとしない。

(3) 中国名を持つ外国人名は、中国人と同じに扱う。

(例)

李? 瑟文集 リ ヤクシツ ブンシュウ

* 李? 瑟は Needham, Joseph (1900-1995) の中国名。

(4) 中国の地名は、「現代中国地名辞典」(学研)を第1典拠とし、「語彙索引」を第2典拠とする。少数民族名については、「中国少数民族一覧」と地名の典拠による。典拠にないものは、他のツールを参考に一般的な日本語の読みを与える。

(例)

北京 ペキン

西藏族 チベットゾク

藏族 ツァンゾク

广西壮族自治区 コウセイ チワンゾク ジチク

石家庄 セキカソウ

* 第2典拠には「セッカソウ」とあるが、採用しない。

典拠で訓読みされる語は、音読みで代える。

(例)

内蒙古 ナイモンゴル

*第1典拠には「ウチモンゴル」とある。

*和書では「ウチモウコ」と読む。

4. 日本語に由来する語

(1) 日本語に由来する同一表記の語は、訓読みを含む日本語の読みに従う。

(例)

浮世? ウキヨエ

空手道 カラテドウ

舌切雀 シタキリスズメ

芥川?之介?集 アクタガワ リュウノスケ センシュウ

初恋 ハツコイ

*島崎藤村の作品

檜山?考 ナラヤマブシコウ

*深沢七郎の作品

二百十日 ニヒャクトオカ

*夏目漱石の作品

浮世澡堂 ウキヨ ソウドウ

*式亭三馬の「浮世風呂」

伊豆的舞娘 イズ テキ ブジョウ

*川端康成の「伊豆の踊子」

桃太郎跟金太郎 モモタロウ コン キンタロウ

*松谷みよ子の「ももたろう・きんたろう」

(2) 日本語に由来するが同一表記でない語については、原則に従い、音読みを与える。

(例)

中国之智慧 チュウゴク シ チエ

*吉川幸次郎の「中国の智慧」

沙拉?念日 サロウ キネンジツ

*俵万智の「サラダ記念日」

千只? センセキカク

*川端康成の「千羽鶴」

蜘蛛人 チシュジン

*江戸川乱歩の「蜘蛛男」

神与人之? シン ヨ ジン シカン

*谷崎潤一郎の「神と人間との間」

(3) 日本語に由来する音訳語は、相当する日本語表記に従う。

(例)

?拉 OK カラオケ
夏普 シャープ

5. 仏教用語は、呉音主体の日本語の慣用読みを与える。

(例)

光明念? コウミョウ ネンジュ

?音? カンノンキョウ

* 「?」は「ケイ」と読むが、仏教用語として使用された場合には「キョウ」と読む。ただし、「孝?」(コウキョウ)など、典拠にあるものは典拠に従う。

6. 日本語・仏教用語以外の外来語

(1) 固有名詞(人名・地名・商品名など)の音訳語は、相当する日本語の読みを採用する。読みが分からない場合は仮にそのまま音読みで登録しておく。

(例)

可口可? コカ コーラ

基督教 キリストキョウ

拿破?? ナポレオン デン

俄?斯 ロシア

?敦 ロンドン

???? ニューヨーク ジホウ

* New York Times

大波斯菊 ダイベルシアギク

* 「コスモス」としない。

墨西哥城 メキシコジョウ

* 「メキシコシティ」としない。

孟加拉国 バングラコク

* 「ベンガルの国」の意味。「バングラデシュ」としない。

南斯拉夫 ナンスラブ

* 「ユーゴスラビア」としない。

(2) 固有名詞の音訳語であっても、相当する日本語の読みがない場合には音読みする。

(例)

托福 タクフク

* 「TOEFL」としない。

(3) 固有名詞の音訳語とともに用いられる「新」と「?(聖)」は、例外として相当する日本語読みを充てる。

(例)

新德里 ニューデリー

?保? サンパウロまたはセントポール

(4) 固有名詞の意識語は、一律に音読みする。

(例)

冰島 ヒョウトウ

*「アイスランド」としない。

牛津 ギュウシン

*「オックスフォード」としない。

旧金山 キュウキンザン

*「サンフランシスコ」としない。

(5) 普通名詞は、意識語・音訳語ともに一律に音読みする。

(例)

?? ラシュウ

*「ロジック」としない。

巧克力 コウコクリョク

*「チョコレート」としない。

引得 イントク

*「インデックス」としない。

迷?裙 メイジクン

*「ミニスカート」としない。

(6) 略語は、一律に音読みとする。

(例)

德国 トクコク

?? ソレン

?列主? バレツ シュギ

*「マルクスレーニンシュギ」としない。

7. 漢数字の読みは日本語資料の規則に従うが、訓読みは採用しない。

(例)

一千零一夜 イッセンレイイチヤ

日?一月通 ニチゴイチゲツツウ

*「一月」は「ヒトツキ」の意味である。

8. 音韻変化について

典拠または国語辞典にない語の読みは、原則として促音便や連濁を採用しない。ただ

し、数詞に続く語は許容する。

(例)

激光 ゲキコウ

*「ゲッコウ」としない。

七色光 シチショクコウ

*「シチショッコウ」としない。

吟?燕? ギンヘン エンゴ

*「ギンペン エンゴ」としない。

古?一百首 コシ イッピャクシュ

*「イチヒャクシュ」としない。

(注)「大漢和辞典」による一般読みの採用方針について

「大漢和辞典」の親字の下には多くの読みが挙げられているものがあるが、音読みとして実際に使用されているものは1つか2つであり、漢音に限定されているわけではない。そこで、一般読みの採用は、次の方針によることとする。

和語や仏教用語の読みを除いた、語彙例で多く使用されている読みを一般読みとして採用する。ただし、「常用漢字表」にその読みがない場合は、表にある読みを優先して採用する。

意味や習慣によって使い分けされるものは、複数の読みも採用する。

語彙例があってもローマ字表記の読みしかないものは、他の字典を参考にする。

語彙例のないものは、原則として親字の下の初出の漢音を採用する。

通常使用されている字体の読みと単に字形の異なるだけの異体字との間で読みが異なるときは、読みを統一する。(例:「乗」はショウと出ているが、ジョウとする。)

「大漢和辞典」にない文字は、他の字典を参考にする。

簡体字の場合には、相当する繁体字の読みを採用する。

11.3.4.3 分かち書き

1. 基本的考え方

(1) 原則として、漢字2字または3字を分かちの基本単位とする。これに、接頭語や接尾語が付加することがある。

(例)

中国民?宗教教派研究 チュウゴク ミンカン シュウキョウ

キョウハ ケンキョウ

世界思想家文?セカイ シソウカ ブンゴ

①漢字1字の語は、分離すると指示されているもの、あるいは、結果として他の語から分離されたものである。

(例)

日本的改革与振? ニホン テキ カイカク ヨ シンコウ

②分離すると指示されている品詞でも、4字以下の分離できない熟語は分離しない。

(例)

?人 イジン

?不着 イフチャク

?而言之 ソウジゲンシ

形而上学 ケイジジョウガク

(2) 中国語では、同一の漢字でも文脈によって品詞が異なることがあり、品詞が異なれば分かちの適用も異なる。したがって、特定の漢字が出てきたら、常に結合あるいは分離することはしないことに注意する。

(例)

把住放向? ハジュウ ホウコウバン

* (ハンドルをしっかりとにぎる) 動詞

一把椅子 イツパ イス

* (一脚のいす) 量詞 (助数詞)

?把坏了 シャハ カイリョウ

* (かじ棒がこわれた) 名詞

把?包拿?来 ハ ショホウ ダ カライ

* (カバンをもってきた) 介詞 (前置詞)

(3) 以下のような構成でまとまった概念を表わす2字語は、熟語化していなくても基本単位として扱い、分離しない。

(例)

叶?花?的夏天 ヨウリョク カコウ テキ カテン

* 主語 + 述語

??易老 コウガン イロウ

* 形容詞 + 名詞, 動詞 + 補語

看信 カンシン

吃? キツギョ

* 動詞 + 賓語 (目的語)

?坏 コウカイ

打死 ダシ

熟透 ジュクトウ

* 動詞 + 補語

已婚的情? イコン テキ ジョウリョ

* 副詞 + 動詞

都来 トライ

* 副詞+動詞

最大 サイダイ

更好 コウコウ

很快 コンカイ

* 副詞+形容詞

(4) 4字あるいはそれ以上でまとまった概念を表わすものは、2字あるいは3字ごとに分離する。

(例)

晶体管功率放大器 ショウタイカン コウリツ ホウダイキ

无??管 ムホウ コウカン

?境保??? カンキョウ ホゴキカク

??唯物主? ベンショウ ユイブツ シュギ

①分離すると原意が不明確になったり再現できなくなるものは、分離しない。

(例)

古??学 コカンゴガク

研究生院 ケンキュウセイイン

?十字会 コウジュウジカイ

古生物学家 コセイブツガクカ

交朋好友 コウホウコウユウ

* 交好朋友と同じ

?明?大迷案 バンミン リョウダイメイアン

②成語またはこれに準ずる4字語は、全体を基本単位とする。

(例)

?平浪静 フウヘイロウセイ

?憎分? アイゾウブンベツ

水到渠成 スイトウキョセイ

光明磊落 コウメイライラク

一衣?水 イチイタイスイ

黒不溜秋 コクフリユウシュウ

不亦?乎 フェキガクコ

?莫能助 アイバクノウジョ

③ABAC形式の4字語は、基本単位とし分離しない。

(例)

胡里胡塗 コリコト
越来越快 エツライエツカイ

④「数詞 A 数詞 B」または「A 数詞 B 数詞」形の 4 字語は、基本単位とし分離しない。

(例)

三心二意 サンシンニイ
?三倒四 テンサントウシ

(5) 単語の重ね型は、次のように扱う。

①AA 形式のものは、これを基本単位とする。

(例)

人人 ジンジン
看看 カンカン
大大 ダイダイ
??的 コウコウ テキ
个个 ココ

②AB を引き伸ばした AAB 形式または ABB 形式のものは、これを基本単位とする。

(例)

蒙蒙亮 モウモウリョウ
亮堂堂 リョウドウドウ
奇奇怪博士 キキカイ ハクシ

③AB を引き伸ばした ABAB 形式のものは、AB を基本単位として分離する。

(例)

研究研究 ケンキュウ ケンキュウ
???? ショウシ ショウシ
雪白雪白 セツハク セツハク
通?通? ツウコウ ツウコウ

④AB を引き伸ばした AABB 形式のものは、全体を基本単位とする。

(例)

来来往往 ライライオウオウ
清清楚楚 セイセイソソ
花花????罐罐 カカダダ ダンダンカンカン

(6) 1 字の語が並列して続くものは、全体を基本単位とする。

(例)

看看看 カンカンカン
儒墨之?同 ジュボク シ イドウ
老荘思想 ロウソウ シソウ
??曲???? シシキョク ゴジ カイシャク
?英徳法?典 カエイトクハウ シテン
?用省市地??代?? ジツヨウ ショウシチケン ゲンダイキカク
?恩列斯著作??局 バオンレツシ チョサク ヘンヤクキョク
江浙豫皖太平天国史料?? コウセツヨカン タイヘイ テンゴク
シリョウ センペン

①並列語の前後に並列語全体にかかる語があれば、これを分離しない。

(例)

分省市 ブンショウシ
十七八? ジュウシチハツサイ
八九天 ハックテン
元明清史 ゲンミンシンシ
?海空? リクカイクウグン
文史哲学集成 ブンシテツガク シュウセイ

(7) 1字の略語は名詞と同様に扱い、2字以上で構成される略語は2字あるいは3字を基本単位とする。

(例)

?保 カンホ
*?境保?の略
人代 ジンダイ
*全国人民代表大会の略
?? ケイボウ
*???易の略
?委会 ヘンイカイ
*??委?会の略
彩?册 サイズサツ *彩??册の略
?文典 カンブンテン *?文文典の略

(8) 日本語でカタカナ表記される外来語は1単位とし、原語の単位で分離しない。

(例)

迷?裙 メイジクン
*ミニスカート
?路易 セントルイス

新德里 ニューデリー
?? ニューヨーク
糶 センチメートル
加那利群島 カナリア グントウ
特立尼?和多巴哥 トリニダード ワトバゴ

(9) 前の語にも後ろの語にも付加することが可能な語は後ろの語と結合させて、できるだけ1字の語は作らない。

(例)

??史稿 ケイザイ シコウ
名人?略 メイジン デンリャク
地方史志学 チホウ シシガク

2. 品詞等の扱い方

(1) 連詞(接続詞)、「得」以外の構造助詞、語気助詞、嘆詞(感嘆詞)、擬声語は、他の要素と分離する。

①連詞

(例)

工人和?民 コウジン ワノウミン
光?而?巨 コウエイ ジカンキョ
不但快而且好 フタン カイ ジショ コウ
?来?是不来 ジライ カンゼ フライ

②構造助詞

(例)

吃的, 穿的, 用的, 都有 キツ テキ, セン テキ, ヨウ テキ, トユウ
大地的女儿 ダイチ テキ ジョジ
?底原理 シ テイ ゲンリ
慢慢地走 マンマン チ ソウ
坦白地告??? タンハク チ コクソ ジハ
少年之家 ショウネン シカ
最??的国家之一 サイハッタツ テキ コッカ シ イチ

* 日本語における「的」は名詞の接尾語であるが、中国語においては、日本語の「の」に当たる助詞であることが多いので、分離する。

* 「之」と方位語が結びついた之前(シゼン)、之内(シナイ)、之至(シチ)のようなものは、2字方位語として1単位とする。

③語気助詞

(例)

?知道?? ジチドウ マ?

快去?! カイキョハ!

④嘆詞

(例)

?! 真美! ア! シンビ!

?, ?説什?? オン, ジセツ ジュウマ?

?, 走着??! フン, ソウチャク ショウハ!

⑤擬声詞

(例)

?! ハク!

?? カカ

" ?隆" 一声 "ゴウリュウ"イッセイ

冬冬冬 トウトウトウ

???? キキササ

大公???啼 ダイコウケイ オクオク テイ

(2) 介詞 (前置詞)

①介詞 (前置詞) は, 一般に他の要素と分離する。

(例)

向??去 コウ トウヘン キョ

他被?除了 タヒ カイジョ リョウ

?人民服? イジンミン フクム

从昨天起 ジュウ サクテン キ

?于?个?? カンウ シャコ モンダイ

在重??中 ザイ ジュウケイ ムチュウ

以党的基本路??重点 イ トウ テキ キホン ロセン イ ジュウテン

②「介詞+名詞」あるいは「動詞+介詞」で2音節を構成するときは, 1単位とする。

(例)

?日 タイニチ

朝南 チョウナン

生于1949年 セイウ 1949 ネン

(3) 方位語 (方向, 場所, 時間などを示す語)

①方位語を修飾する副詞は, 分離しない。

(例)

?左 キョクサ

稍后 ショウゴ

最后 サイゴ

?上? キンジョウトウ

再下?儿 サイカヘンジ

?前? チョウゼントウ

②接頭の1字方位語は、分離しない。

(例)

北半球 ホクハンキュウ

前半生 ゼンハンセイ

西?摩? セイサモア

③1字語を修飾する2字方位語も分離しない。

(例)

?南? トウナンア

④接尾の1字方位語は分離しない。

(名詞例)

山上 サンジョウ

?下 ジュカ

河里 カリ

一年后 イチネンゴ

?渡中 カトチュウ

企?内 キギョウナイ

座?会上 ザダンカイジョウ

二十世?初 20 セイキシヨ

网??境下 モウラク カンキョウカ

稀土金属?化合物 キド キンゾクカン カゴウブツ

近百年来的中国 キンヒャクネンライ テキ チュウゴク

(動詞例)

添上 テンジョウ

放下 ホウカ

拿来 ダライ

送去 ソウキョ

走?教室 ソウシン キョウシツ

爬上主峰 ハジョウ シュホウ

⑤接尾の2字方位語は分離する。

(名詞例)

河里面 カリメン

?外面 モン ガイメン

火?上面 カシャ ジョウメン

学校旁? ガッコウ ボウヘン

(動詞例)

走?来 ソウ シンライ

跳上去 チョウ ジョウキョ

想出来 ソウ シュツライ

搬起去 ハン キキョ

笑起来 ショウ キライ

??去 ウン カキョ

送回来 ソウ カイライ

⑥例外として、固有名の接尾の方位語は分離する。(1字姓を除く)

(例)

粤中??史 エツ チュウ ジュウタイシ

永定河上 エイテイカ ジョウ

(4) 接頭語

①接頭辞(副, ?, 非, 反, 超, 老, 阿, 可, 无, 各, 毎など)は, 分離しない。

(例)

副部? フクブチョウ

非金属 ヒキンゾク

超声波 チョウセイハ

?工程? ソウコウテイシ

反?道?? ハンダンドウ ドウダン

非??人? ヒギョウム ジンイン

各学科 カクガッカ

毎年 マイネン

②接頭の1字形容詞は, 分離しない。

(例)

?高粱 コウコウリョウ

新時期 シンジキ

高科技 コウカギ

天地人巨系?? テンチジン キョケイトウカン

大草原上的小房子 ダイソウゲンジョウ テキ ショウボウシ

③独立性をもち、それだけで1個の名詞的概念を表わす接頭の語は、分離する。

(例)

夢?天 ム ヒテン

女?者 ジョ キシャ

金?弓 キン ダンキュウ

核武器 カク ブキ

④固有名の前の接頭語は、分離する。(1字姓を除く)

(例)

新中国 シン チュウゴク

反?恩斯? ハン ケインズ ロン

⑤タイトルの冒頭にあって全体にかかるものは、分離する。

(例)

新英?学生?典 シン エイカン ガクセイ シテン

(5) 接尾語

①接尾辞(子, 儿, 遊, 性, 者, 垂, 家, 手, 化, 断など)は、分離しない。

(例)

卓子 タクシ

画儿 ガジ

木? ボクトウ

乘?? ジョウムイン

??家 ゲイジュツカ

科学性 カガクセイ

?代化 ゲンダイカ

溶拉机手 タクロウキシユ

他? タモン

孩子? ガイシモン

②基本単位の接尾に1字の名詞が付加してまとまった概念を構成するものは、分離しない。

(例)

中文? チュウブンシヨ
水?? スイコデン
?官表 ショツカンヒョウ
糊?翁笑? コトオウ ショウダン
徳江?堂? トクコウ ダドウギ
秦?史研究 シンカンシケンキュウ
唐宋?通? トウソウシツウロン
元明?概? ゲンミンシガイセツ
PC 系列机工具箱 PC ケイレツキ コウグシヨウ

③基本単位の接尾の1字名詞でも、熟語としづらいものは分離する。

(例)

隋唐??? ズイトウ リュウ デンセツ

(6) 人名・地名・団体名

①人名は、姓と名をそれぞれ1単位として、他の要素と分離する。ペンネーム、別名などはこれに準ずる。

(例)

李准 リ ジュン
王国? オウ コクイ
梅?芳 バイ ランホウ
?方朔 トウホウ サク
?葛孔明 ショカツ コウメイ
毛主席 モウ シュセキ
蔣?? ショウ ソウトウ
田主任 デン シュニン
杜工部 ト コウブ
唐王右丞?集 トウ オウ ウジョウ シシユウ
*唐の王維

②固有名化した呼称は、2字あるいは3字を1単位とする。

(例)

孔子 コウシ
西施 セイシ
孟?君 モウショウクン
武?天 ブソクテン
包公案??八? ホウコウ アン シワ ハッシェ
天花藏主人 テンカゾウ シュジン

③現代中国人の2字のペンネームは、第1字が「百家姓」にあれば、姓名扱いをする。百家姓にないものおよび同じ文字が繰り返されているものは、全体を1語とする。

(例)

?迅||ロ ジン

巴金||ハ キン

老舍||ロウシャ *百家姓にない

毛毛||モウモウ

④姓に付加する「氏」と「家」は、分離しない。

(例)

司?氏 シバシ

白氏文集 ハクシ モンジュウ

斯??斯氏 スマイルスシ

蒋家王朝 ショウカ オウチョウ

⑤1字姓が名とセットで用いられないときは、普通名詞とみなす。

(例)

小? ショウリュウ

老? ロウセン

呉老 ゴロウ

毛? モウシ

杜??? トシ センドク

李杜?句 リト ゼック

?批孟子 ソヒ モウシ

岳王全? ガクオウ ゼンデン

?岳全? セツガク ゼンデン

?后?暴 トウゴ フウボウ

周恩来批判:名家?周集 シュウ オンライ ヒハン:メイカ
ヒョウシュウシュウ

⑥地名と団体名は、日本語資料の基準に従う。

(例)

北京市 ペキンシ

河北省 カホクショウ

??江 オウリョクコウ

泰山 タイザン

洞庭湖 ドウテイコ

台湾海峡　　タイワン カイキョウ
西?河　セイリョウガ
景山后街　　ケイザンゴガイ
中?人民共和国　チュウカ ジンミン キョウワコク
中国社会科学院　　チュウゴク シャカイ カガクイン

(7) 動詞

①1字の動詞の後ろの「住」「着(zhao)」「動」「到」「見」「懂」「会」「完」「了(liao)」「在」「?」「錯」「好」は分離しない。

(例)

記住　キジュウ
?着　　バイチャク
?到　　コウトウ
?完　　セツカン
念了　ネンリョウ
写好　シャコウ
太?照在桑干河上　　タイヨウ ショウザイ ソウカンガ ジョウ

②動詞とその後ろの動態助詞「着(zhe)」「了(le)」「過」は分離しない。

(例)

看着　カンチャク
?行了　シンコウリョウ
消??　　ショウキョクカ

③「動詞+賓語(目的語)」で3字以上になるものは分離する。

(例)

?玩笑　カイ ガンショウ
交流??　コウリユウ ケイケン

④動詞と目的語の間に他の要素が入ったものは、分離する。

(例)

鞠了一个躬　　キュウリョウ イッコ キュウ
理?三次?　　リカ サンジ ハツ
生起氣来了　　セイ キ キライリョウ
拿起一本?来　　ダキ イッポン ショ ライ

⑤「動詞あるいは形容詞+補語」で3字以上になるものは、分離する。

(例)

建成楼房 ケンセイ ロウボウ
化?蒸气 カイ ジョウキ
当做笑? トウサ ショウワ
整理好 セイリ コウ
建?成公? ケンセツ セイ コウエン
改写??本 カイシャ イ ゲキホン

⑥繫詞「是」の接頭の副詞は分離しない。それ以外は単独で用いる。

(例)

但是 タンゼ
真是 シンゼ
都是 トゼ
也就是 ヤシュウゼ
并不是 ヘイフゼ
?是我的? シャゼガテキシヨ
色是刀・情是?シヨクゼトウ・ジョウゼケン

⑦「動詞または形容詞+得+補語」「動詞または形容詞+不+補語」形の3字語は、1単位とする。

(例)

吃得消 キツトクシヨウ
?得很 コウトクコン
高得多 コウトクタ
?不起 タイフキ
想不到 ソウフトウ
怪不得 カイフトク

⑧4字以上の場合の「得」は、分離する。

(例)

冷得?抖 レイトクハツトウ
写得不好 シャトクフコウ
打?得干? ダソウトクカンジョウ

⑨4字以上の場合の「不」は、補語と組み合わせて1単位とする。

(例)

看不出来 カンフシュツライ
听不?去 チョウフシンキョ

(8) 代詞 (代名詞)

①代詞に付加してその意味を補うものは、1単位とする。

(例)

?些 シャサ
?? シャマ
??些 シャマサ
那? ナヨウ
?般 シャハン
那里 ナリ
?里 ナリ
?? シャヘン
?会儿 シャカイジ
怎?? シンマヨウ

②代詞に1字の量詞あるいは名詞が結びついたものは1単位とし、2字のものは分離する。

(例)

?个 シャコ
我国 ガコク
??位 ジタンイ
??人 ジアイジン
某人 ボウジン
某工厂 ボウ コウショウ
其他 キタ
其原理 キゲンリ
本市 ホンシ
本部? ホン ブモン
?刊 ガイカン
?公司 ガイ コウシ
有其母必有其女 ユウ キボ ヒツユウ キジヨ

③代詞と数詞との間は分離する。

(例)

?一代人 シャ イチダイ ジン
那一会儿 ナ イツカイジ

(9) 数詞と量詞

①連続した数字は、分離しない。

(例)

九?零七万二千三百五十六 キュウオクレイシチマンニセンサンビャクゴジュウロク
新十日? シン ジュウニチ ダン
五四??史 ゴシ ウンドウシ
四八烈士 シハチ レッシ
二十万分之一河南省??? ニジュウマンブン シ イチ カナンショウ チョウサズ

②小数を含む数字は1語とする。

(例)

二点五 ニテンゴ
零点七五 レイテンシチゴ

③序数を表わす「第」に続く数詞は、分離しない。

(例)

第十三 ダイ 13
第三百五十六 ダイ 356

④数詞と量詞は1単位とし、分離しない。

(例)

?个人 リョウコ ジン
一百多个 イッピャクタコ
十来万人 ジュウライマン ジン
几家人 キカ ジン
几天工夫 キテン クフウ
几十根?管 キジュッコン コウカン
十几个人 ジュウキコ ジン
无名格言一千句 ムメイ カクゲン イッセンク

⑤代詞あるいは数詞と結びつかない量詞は、分離する。

(例)

想个?法 ソウ コ ベンポウ
?面是?稻田 タイメン ゼ カイ トウデン

⑥形容詞に付加して程度を表わす「些」「点」「点儿」などの不定量詞は、分離しない。

(例)

大些 ダイサ
快点儿 カイテンジ
安静点 アンセイテン

⑦不定量詞に数詞が含まれるものは、分離する。

(例)

大一些 ダイ イッサ

快一点儿 カイ イッテンジ

(10) 副詞

①2字以上の副詞は、他の要素と分離する。

(例)

??走 ゴウゴウ ソウ

非常快 ヒジョウ カイ

十分感? ジュウブン カンドウ

②否定副詞は、動詞や形容詞との間を分離しない。

(例)

不来 フライ

不如 フジョ

不可能 フカノウ

?不?? オウ フオウガイ

別? ベッセツ

没来 ボツライ

没交渉 ボツコウショウ

11.3.4.4 ピンイン表記

1. 各種辞典、字書にもとづいて記録する。辞典、字書間に異同がある場合、最新のものに従う。

(例) 新華字典(商務印書館)、中日大辞典(大修館書店)、現代漢語詞典(商務印書館)、現代中国語辞典(光生館)、中日辞典(小学館)、新字源(角川)、辞海(上海辞書出版社)

解説(ピンインの選択)

(1) 漢字1字に対し複数の読み方があるときは、上記辞典を参考にして適切なものを選択する。

(例)

重心 zhong xin 重新 chong xin

成? cheng zhang ?城 chang cheng

?? chuan tong ?? zhuan ji

大会 da hui 会? kuai ji

(2) 地名、姓は辞典、参考図書等を参照して読み方を確定する。名に使われている字が複数の読み方をもつときには人名辞典等を参照し確定する。確定できないときにはよく使われている読み方を選択する。

(例)

人名辞典

現代中国人名辞典（霞山会）1995年版，1991年版（ただし台湾関係などはウェード式）

（現代中国人名辞典（国書刊行会）はウェード式表記のため不適）

中国情報人物事典（三菱総合研究所）

地名辞典

最新中国地名事典（日外アソシエーツ）

現代中国地名辞典（学習研究社）

2. ピンインは、CHINA MARC に準拠し、漢字一字ごとに分かち書きする。単語ごとの分かち書きは採用しない。

(例)

西安事?史料 xi an shi bian shi liao

*xi'an shibian shiliao とはしない

3. ピンインには四声その他の記号はつけない。ウムラウトはつけなくてもよい。

(例)

?色食品 lu se shi pin

*lu se shi pin としてもよい

4. ピンインはすべて小文字で表記する。

5. タイトル中の漢数字にはピンインを付与し、英数字、記号等はそのままと表記する。回次、年次、日付を表す漢数字であってもピンインを付与する。

(例)

我的一九九七 wo de yi jiu jiu qi

我的 1997 wo de 1997

6. 児化韻を表す「児」（儿）は、前の音節に「r」をつけて表記する。「er」とはしない。

(例)

一会儿 yi huir

花儿 huar

(参考)

?儿 ying er

*児化韻ではなく、「小児」を表す場合

7. 助詞の「的」、 「地」は「de」と表記する。助詞の「了」は「le」と表記する。助詞の「着」は「zhe」と表記する。

(例)

中国的外交政策 zhong guo de wai jiao zheng ce

?利地完成任? sheng li de wan cheng ren wu

取得了?大?利 qu de le wei da sheng li

走着去 zou zhe qu

(参考)

的? di que

地球 di qiu

了解 liao jie

着手 zhuo shou

着火 zhao huo (助詞以外の場合)

8. 「子」は「zi」と表記する。前の音節に「z」を付ける方法(岩波中国語辞典など)は採らない。

(例)

孩子 hai zi

*haiz とはしない